

海域アジア・オセアニア
NEWSLETTER

第3号 2025

目次

【論説】

縮図としての祭宴 河野正治 1

【エッセイ】

ケニアのチャイナタウン 金 重李.. 32

旧商館に響く音楽 内住哲生.. 38

アントレプレナーとは誰か？ 柿倉圭吾.. 44

ジョホールバルの遊神と無形文化遺産への道 横田浩一.. 49

三亜にいながら三亜にいない感覚 陳 昭.. 59

新宿のネオンを巡る 神宮寺航一.. 68

「おが丸」出港時に鳴り響く見送り太鼓 李婧・河野正治・横田浩一.. 78

【書評】

畑中幸子著『南太平洋の環礁にて』 河合洋尚.. 84

【活動報告】

2024 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点研究会・活動報告
..... 89

縮図としての祭宴

—ミクロネシア連邦ポーンペイ島の儀礼実践にみる太平洋の国際政治と土着の政治

河野正治

一 序論

本稿は、ミクロネシア連邦ポーンペイ島における首長制と儀礼実践の比較的新たな局面を、海域アジア・オセアニア研究の立場から取り上げることにより、現代オセアニア島嶼部における土着の政治の様相を従来の文化人類学の視点とは異なる角度から論じるものである。

オセアニア島嶼部の土着の政治をめぐる文化人類学の研究では、リーダーシップの問題を個人の資質ではなく社会の構造の問題として捉える視点から、首長制、ビッグ・マン制、グレート・マン制などの類型論的な政治制度の分類を基礎に、これまでもさまざまな研究が積み重ねられてきた [サーリンズ 1976 ; 吉岡 1993 ; 清水 1989 ; Douglas 1979 ; Godelier 1986 など]。1990 年代以降はそうした分類を政治制度の比較研究の基礎としつつも、歴史的な政治経済過程の中に土着の政治を再定位するポスト植民地研究が隆盛した。それらの研究では、オセアニア島嶼部に特有なリーダーシップとそれにもとづく政治のあり方が、過去から変わらずに続く伝統的な政治としてではなく、植民地統治や国民国家形成の過程における西洋近代的な統治体制と土着の政治との歴史のもつれあい (historical entanglement) の産物として論じられた [柄木田 2000 ; 須藤 2008 ; 則竹 2000 ; Lindstrom & White 1997 ; Thomas 1989 など]。

近年においても、中国資本によるヤップ島の開発プロジェクトと土着の政治との関係について論じた研究 [Huang 2017 ; 町 2014] などが例外的にあるものの、概して植民地統治の歴史的影響や、ポスト植民地期における旧宗主国との現代的な関係に議論が集中してきたといえる [吉岡 2005 ; 丹羽・石森 (編) 2013 など]。

植民地主義の影響関係を過去・現在・未来を通して問う議論は確かに重要であり、そのような研究は継続的になされるべきである。しかし、2021 年に *The Journal of Pacific History* 誌で組まれた特集「流動的なフロンティア——歴史的な観点からみたオセアニア

とアジア (Fluid Frontiers: Oceania and Asia in Historical Perspective)」のなかで繰り返し指摘されたように、西欧列強を中心とする旧宗主国との関係ばかりに焦点が当たると、地理的かつ歴史的に深い関係にあるはずのアジアとオセアニアの相互作用が不可視化されてしまう恐れがある [D'Arcy & Mayo 2021 : 232 ; 河野 2023 : 3] ¹。

したがって、オセアニア島嶼部における土着の政治を文化人類学的に考察するにあたっては、今日における植民地統治の影響や旧宗主国との関係に関する現地調査及び文献調査を継続的に進めつつも、過去の事象 ²と現代的な事象の双方を探求するうえで、東アジアや東南アジアとのかかわりを視野に収めることが肝要である。

そのような立場から研究を進めるうえで、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの視座はきわめて有用である。論者によって強調点は異なるものの、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの核心のひとつは、「陸域」中心ではなく「海域」中心の視座を持つことにより、「地域を超えた地域研究」を実践することにある。このプロジェクトの枠内でブックレットシリーズとして公刊された幾つかの研究成果でも [河合 2024 ; 小野 2024 など]、通常の地域研究の枠組み——東アジア研究、東南アジア研究、オセアニア研究など——から零れ落ちる、アジアとオセアニアの歴史的ないし同時代的な相互作用を研究の枠組みに組み入れることが目指されてきた ³。

しかしながら、太平洋諸島への中国の進出をはじめとする、アジアとオセアニアの現代的な相互作用を探求してきた国際関係論の成果があるにもかかわらず [黒崎 2019, 2022 ; 八塚 2018 ; Puas & D'Arcy 2021 など]、筆者のみるところ、これまでの海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの一連の活動において、同時代の政治への言及は部分的なものにとどまっている ⁴。人やモノの移動に伴う文化的・社会的・経済的な側面への着目も確

¹ このようなアジアとオセアニアの同時代的かつ越境的な政治への着目は、たとえばミクロネシアにおける戦前の日本統治に関する人類学的研究 [飯高 2009 など] を、歴史人類学とは異なる枠組みで再評価することにもつながるであろう。

² とりわけミクロネシアは、歴史的にみても、16世紀にフィリピンとグアムを拠点とするガレオン船が中国とメキシコの交易をつなぎ、20世紀前半の日本統治期には日本の本土出身者や沖縄出身者、朝鮮半島出身者が移住するなど、東アジア・東南アジアとの深いかかわりで知られている。

³ たとえば、河合洋尚は、「二一世紀の南太平洋島嶼部を語るにあたり、もはや中国（さらには他の東アジアや東南アジア）からの移住者がもたらす影響を無視することができないであろう」 [河合 2024 : 5] と述べ、南太平洋島嶼部に広がる中国系移住者のネットワークの有り様を、マルチサイト民族誌の手法から明らかにしようとしている。また、小野林太郎は「オーストロネシア語族の人びとが、海の暮らしの中で製作・利用してきたモノたちに注目し、それらのモノを通して海域アジアからオセアニアへといたる海域世界に暮らしてきた人類の歴史や文化について検討・紹介する」 [小野 2024 : 4] と述べ、物質文化の側面から両地域の相互作用を捉える枠組みを提案している。

⁴ とはいえ、同時代の政治への言及が全くなされていないわけではない。たとえば、河合は南太平洋島嶼部における中国からの移民を扱うに際し、1978年末における改革開放政策以来の中国の政治経済的な

かに重要であるが、アジアとオセアニアの現代的な相互作用を読み解くためには、これまであまり言及されてこなかった政治的な側面にも目を向ける必要があるだろう。

ただし、上記の国際関係論の枠組みは、国家間の力学というマクロな政治の脈絡に関心を集中させるあまり、対人的な利害関心の調整というミクロな政治の脈絡——とりわけ、首長制やビッグ・マン制をはじめとする、近代国家の政治とは異なる土着の政治の脈絡——を捉えきれない点に限界を抱えている [cf. 河野 2023]。したがって、マクロな政治とミクロな政治の双方を視野に収めることのできる文化人類学の視点が有用である。

本稿では以上の整理を踏まえつつ、ミクロネシア連邦ポーンペイ島における筆者の短期調査の結果を手がかりに、太平洋に進出する中国とミクロネシア連邦との関係性を文化人類学の視点から取り上げ、海域アジア・オセアニア研究の立場から同国におけるマクロな政治とミクロな政治の同時代的な関係性の一端を論じることを目的とする。

二 ポーンペイ島にみる諸外国からの統治と土着の政治

1 ポーンペイ島における首長制の概要

ポーンペイ島は北緯 7 度・東経 158 度に位置する火山島であり、ミクロネシア連邦の首都パリキール (Palikir) が置かれる主島である。2010 年時点の人口統計によると、同島は 34,789 人の人口を抱える [Division of Statistics, FSM Office of Statistics, Budget, Overseas Development Assistance and Compact Management 2012 : 8]。

文化人類学の研究群において、オセアニア島嶼部における土着の政治は、首長制、ビッグ・マン制、グレート・マン制などの用語で知られてきた。このうち、本稿で取り上げるポーンペイ島における土着の政治の形態は首長制にあたる⁵。首長とは社会の中心に位置する伝統的権威者であり、その権威は身分と役職によって保障される [サーリンズ 1976]。

ミクロネシア連邦はポーンペイ、チューク、ヤップ、コスラエという 4 つの州 (state) から成り、そのうちポーンペイ島はその離島とともにポーンペイ州に属する。州の下位単位は行政区 (municipality) である。ポーンペイ島にはポーンペイ州に属する 11 の行政区

プレゼンスの高まりが移民の急速な増加につながったことに着目し、1978 年以前の中国系移民とその子孫を旧移民、1979 年以降の中国系移民を新移民と区別している [河合 2024 : 4-7]。

⁵ 清水昭俊はミクロネシアのなかでも中央集権的な性格が強いポーンペイやコスラエの首長制を集中的首長制と分類し、階層性と平等性の複合形態としての「同等者中の第一人者」的首長制と区別している [清水 1989]。

のうち6つの行政区——マタラニーム (Madolenihmw)、ウー (U)、キチー (Kitti)、ネッチ (Nett)、ソケース (Sokehs)、コロニア (Kolonja) ——があり⁶、それぞれの行政区には民主的な選挙により選出された1名の行政区長 (chief minister) がいる。

首長制はこうした行政区分と並行する形で存立している。具体的には、コロニアとネッチを除く行政区には、その名称と地理的な境界を同じくする首長国 (*wehi*) が重なる。たとえば、マタラニーム行政区とマタラニーム首長国は名称のみならず、地理的な境界を共有する。ネッチ首長国のみ、コロニア行政区とネッチ行政区を合わせたエリアを地理的な範囲としている (図1)。島全体を統括する伝統的政体 (traditional polity)⁷はない。

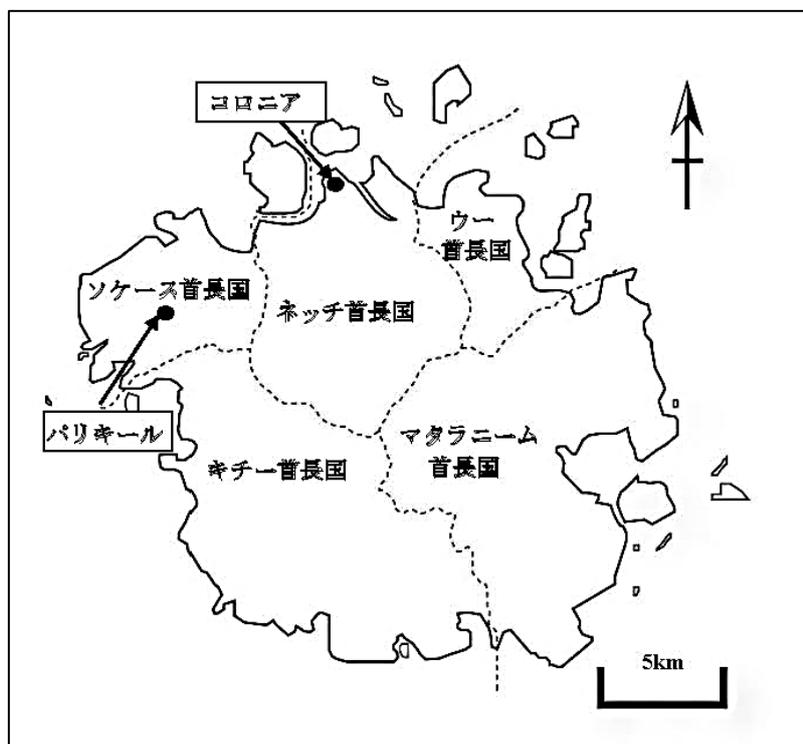


図1 ポーンペイ島の行政区と首長国

(Riesenberg [1968 : 9] をもとに筆者作成)

各々の首長国には、ポーンペイ語でナーンマルキ (*Nahnmwaki*) と呼ばれる最高首長とナーニケン (*Nahnken*) と呼ばれる副最高首長がおり、それぞれの首長国はこれらの首長

⁶ 残り5つの行政区はポーンペイ島の離島にあたる。

⁷ 5つの首長国が成立する以前には、シャウテレウル (*Saudeleur*) 王朝という単一の政体が島全体を統治していた。片岡修によれば、王朝の存立時期は500年頃から1500年頃までと推定される [片岡2009]。

を中心かつ頂点として身分階層的に編成されている。各首長国には下位単位として15～30程度の村 (*kousapw*) があり、それぞれの村は首長国と同様に、村首長 (*soumas*) と副村首長 (*peлиндahl*) を中心かつ頂点として身分階層的に構成される。

首長国と行政区は名称と地理的境界こそ共有しているものの、政治的には切り離されている。つまり、行政区長と最高首長は別々の人物であり、行政区議会における意思決定には最高首長や副最高首長は介在しない。また、村に相当するほど小さな行政単位はない。

こうしたポーンペイ島の首長制は、文化人類学の既往研究において、身分階層秩序を支える「名誉 (*wahu*)」の価値と、その指標となる位階称号 (*mwar*) で知られる。称号と「名誉」をめぐる政治と経済は、古典的な研究から比較的近年の研究にいたるまで、同島に関する文化人類学の研究群のなかで常に重要な主題であり続けてきた [中山 1986 ; 清水 1995 ; 河野 2019a ; Petersen 1982 ; Fischer 1974 ; Hubbard 2016 ; Keating 1998 など]。

他方で、ポーンペイ島には、19世紀前半における捕鯨船の寄港やキリスト教宣教師の来島、スペイン統治 (1885-1899年)、ドイツ統治 (1899-1914年)、日本統治 (1914-1945年)、アメリカ統治 (1945-1986年) を経て、1986年にミクロネシア連邦の一部として独立したという他者接触の歴史があり、これらの統治との関連でも多くの成果が発表されてきた。

2 諸外国からの統治にみる歴史のもつれあい——首長制と儀礼実践を中心に

位階称号には、最高首長から授与される首長国称号 (*mwar en wehi*) と村首長から授与される村称号 (*mwar en kousapw*) の2種類がある。これらの称号にはいずれも名称と明確な順位があり、首長を頂点とする身分階層秩序を支える媒体としての役割を果たす。

称号を保持する島民はその位階に見合った「名誉 (*wahu*)」を認められる。清水昭俊は、ポーンペイの首長制が「名誉」の価値を基軸とすることから、この政体の特徴を「名誉のハイアラーキー」と表現している [清水 1995]。他方で、称号は生まれもって授かる固定的なものではなく、祭宴 (*kamadipw*)⁸での貢献度などに応じて首長からその都度授与される獲得的なものであり、島民間の競争と首長からの承認にもとづく昇進を伴う。この点

⁸ ここでいう祭宴とは、首長のために1年に1度催される祭宴に限らず、首長に対する初物献上、葬式や親族の集まり、誕生日の祝い、客人の歓待、キリスト教の行事など、島民の集まる機会にほぼ同一のやり方で実施されるものであり、食物の再分配と共食を伴う儀礼的实践である。

で、位階称号は「名誉」の価値を体現するのみならず、「社会的威信の公的な指標」[清水 1989 : 132] でもある。

こうした名誉と威信のエコノミーは、諸外国による統治という外的な影響を通じて変形した。とりわけ、多くの先行研究が言及してきたのは、西洋近代的な政治経済システムと土着の政治経済との歴史のもつれあいの諸相である [中山 1986 ; 清水 1981, 1992 ; 河野 2019a, 2019b ; 則竹 2000 ; Fischer 1974 ; Petersen 1997 など]。以下では、主に4つの点に絞って整理を行う。

第一に、ドイツ統治時代の土地改革による首長制の変容である。ドイツ政庁は、経済発展を進める狙いから土地改革案を作成し、その改革案に反対した住民の抵抗運動を徹底的に鎮圧した後、土地私有権の導入を要とする土地改革を 1911 年に断行した。それにより最高首長は土地権を失ったが、ドイツ政庁はその補償として最高首長に対する 1 年に 1 度の「礼の祭宴 (*kamadipwen wahu*)」の開催を各村に義務づけた⁹。こうした措置も相俟って、島民たちは、最高首長に最上級の「名誉」を認める従来の理念的・象徴的枠組みから新しい土地制度を理解し、最高首長に対する初物献上などの「慣習」が継続されるなど、土地に纏わる最高首長の権威は持続した [中山 1989 ; 清水 1999 ; 則竹 2000 : 177]。

第二に、アメリカ統治時代の 1950 年代に議会制民主主義と選挙制が導入され、英語の使用や議会討論による意思決定、文書の作成などに長けた者が政治家や官僚になる傾向が強まると、最高首長は政治の表舞台から相対的に距離を置くようになった¹⁰。結果として、ポーンペイ島民は、首長国と行政区の政治を「伝統的な事柄 (祭宴や称号のシステム) と非伝統的な事柄 (税金や法律の公布など) の二つに区別」[中山 1994 : 101] するようになり、前者を最高首長や高位称号保持者から成る「ポーンペイの側 (*pali en Pohnpei*)」の政治と、後者を政治家や官僚から成る「外国の側 (*pali en waii*)」の政治と認識するよう

⁹ ドイツ政庁は首長制にもとづく土地制度がコブラの増産をはじめとする経済発展策を妨げていると考え、最高首長による土地の支配を制限することを狙って土地改革を断行した [中山 1986 : 64 ; 松島 2007 : 18]。「礼の祭宴」を制度化した狙いも、最高首長への補償というよりも、むしろ最高首長への食物貢納の回数を制限することであった [Fischer 1974 : 168]。

¹⁰ 一般には、こうした動きは民主主義に首長制が適応できなかった結果であるとみなされるだろう。しかし、統治する側である国家の視点ではなく、統治される側である民衆の視点を重視する政治人類学は、そのようには考えない [cf. スコット 2013]。ポーンペイ島に関する先行研究の中で、民主主義の枠内での首長制を議論すること自体が最高首長に対する権威の侵害であるという住民の声 [清水 1993 : 18] や、最高首長が議会政治と土着の政治の双方で権力を掌握することへの住民の恐れ

[Petersen 1997] が指摘されていることを踏まえると、同島における議会政治と首長制の分離は、議会政治への適応の失敗ではなく、むしろ首長制を議会政治の外部にとどめおこうとする島民側の努力の結果と考えるべきであろう。

になった。筆者自身が 2010 年前後に行った長期調査によると、今日では「ポーンペイの側」は「慣習の側 (*pali en tiahk*)」、「外国の側」は「政府の側 (*pali en koapwoarment*)」¹¹とも呼ばれている [河野 2019a : 97]。

第三に、「ポーンペイの側」ないし「慣習の側」と「外国の側」ないし「政府の側」という理念的な区別があり、双方の活動領域が交差しないにもかかわらず、個々人のレベルでは双方の「側」の地位体系をめぐるやり取りや駆け引きがなされてきた。多くの先行研究が指摘してきたように、最高首長は伝統的エリートとしての自らの影響力を保つために¹²、「外国の側」に属する政治家や官僚などの新興エリートに称号を授与し、かれらを高位称号保持者として「ポーンペイの側」に取り込んできた [Dahlquist 1974 ; Fischer 1974 ; 中山 1986 ; 清水 1992 など]。新興エリートが政府や行政のシステムのなかで地位を上昇させたとしても、その地位は「名誉」の価値にもとづいて表現されるものではなかった。そのため、政治家や官僚などの新興エリート層は、見返りとしての高位称号の授与を求めて、首長層が臨席する祭宴への貢献を強めた。

このように伝統的エリートと新興エリートの双方が祭宴と称号授与を利権獲得の手段として利用してきたことは、その他の島民からしばしば「[祭宴の場が] ビジネス (*pisnis*) になってしまった」として陰で批判されている [中山 1994 : 102 ; 河野 2019a : 285-308, 2019b]。それにもかかわらず、筆者が報告してきたように、最高首長をはじめとする高位称号保持者に対して過剰な「歓迎の贈与」(*kouwou*) がなされたり、政治家やアメリカ大使を首長である「かのよう」にもてなしたりするなど、祭宴の「ビジネス」化の動きは加速している [河野 2019a : 285-308]。

第四に、主にミクロネシア連邦独立前後から活発化した人の移動に伴う首長制の新たな展開である。まず、たとえばポーンペイ本島の首長が離島出身者に称号を与えたり、首長制のシステムをもともと持っていなかった離島コミュニティがポーンペイ本島の首長制のシステムを模した儀礼実践を行ったりするなど、国民国家統合下における民族間関係の再編のもとで首長制をめぐる越境的な展開がみられた [Lieber 1984 ; cf. 柄木田 2016]。また、1986 年の独立時にアメリカ合衆国と締結した自由連合協定により、ミクロネシア連

¹¹ これら 2 つの「側」に、キリスト教会の活動にもとづく「教会の側 (*pali en sarawi*)」という区分が付け加わることもある [河野 2019a : 98]。

¹² 植民地行政下で役職を与えられたドイツ統治時代・日本統治時代とは異なり、アメリカ統治時代における貴族院廃止後の最高首長は、土着の政治における地位は考慮されず、政府から給与などの経済保障を得ることができなかったことから、政治的かつ経済的に不安定な地位に置かれた [中山 1986 : 78]。

邦の住民はアメリカへの就労ビザなしでの渡航が認められ、ミクロネシア出身者の海外渡航は増加し、アメリカ合衆国のカンザスシティやハワイなどでは移民コミュニティが確立された〔清水 2004 ; 前川 2004 ; Falgout 2012 ; Hubbard 2016 など〕。なかでも、ポーンペイ島出身者が多く渡航するカンザスシティでは、本島の首長制を模した儀礼実践が新たに創造されたことが報告されている〔Hubbard 2016〕。このように、独立前後を画期とした人口移動に対応する形で、土着の政治のシステムが地理的な境界を越えて展開する様子も報告されてきた。

以上のように、ポーンペイ島を対象とする文化人類学の既往研究においては、諸外国の統治を通して導入された西洋近代的な国家体制の中に土着の政治という異質な原理が今もなお孕まれる、という矛盾がいかに調停・交渉されるのかという課題が、歴史のもつれあいという概念を軸に検討された。他方において、第一章でも論じたように、これまでの研究では旧宗主国による統治過程との関係性に議論が集中するあまり、南洋群島としてミクロネシア地域を統治した日本との関係性を除いては、地理的かつ歴史的に密接なつながりを有する東アジアと東南アジアとの関係性が十分に論じられてこなかった。

次章では、近年においてオセアニア島嶼部への海洋進出が一般に取り沙汰される中国との関係性を取り上げ、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの立場からみたポーンペイ島の土着の政治の諸相の一端を論じる。

三 ポーンペイ島にみる中国の海洋進出と島民の生活世界

1 ミクロネシア連邦にみる中国の進出

国際連合経済社会局（UNDESA : The United Nations Department of Economic and Social Affairs）の統計資料によると、ミクロネシア連邦への移民の出身国はアメリカやフィリピン、日本、韓国などが多く、中国からの移民の人数はそれほど目立たない（表 1）。

表1 ミクロネシア連邦における出身地・出身国別の移民数（2024年）

出身国	移民の人数	出身国	移民の人数
中国、香港	20	マーシャル諸島	94
日本	48	北マリアナ諸島	77
韓国	47	パラオ	292
フィリピン	130	アメリカ領サモア	22
アメリカ	179	サモア独立国	20
グアム	38	トンガ	17

出所：UNDESA のウェブサイト [2024] をもとに筆者作成

しかしながら、中国は 2000 年代以降の援助を通じて、同国での存在感を確実に高めつつある。表 2 は、在ミクロネシア日本国大使館のウェブサイトに掲載されている情報をもとに、中国からミクロネシア連邦への 2000 年以降の援助内容を整理したものである。これをみると、公共施設の建設を中心とした援助が継続的になされてきたことがわかる。

表2 中国からミクロネシア連邦への援助内容（2000年～2016年）

援助年	援助内容
2002	ミクロネシア短期大学ナショナルキャンパス体育館の建設
2007	チューク国際空港ターミナル改築・修復
2007	ヤップ州内用貨物運輸船の建造
2007	コスラエ州での高等学校建設
2007	ソーラー電力を利用した街灯 171 基の建設
2008	中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）本部事務局の建設
2008	大統領・副大統領・連邦議会議長・最高裁判所長官の 4 公邸の建設
2008	ポーンペイ州庁舎の建設
2016	コスラエ州オカト橋の建設
2016	ポーンペイ州立病院への医療機材供与
2016	太平洋諸島フォーラム開催に備えた高級車 15 台の供与

出所：在ミクロネシア日本国大使館のウェブサイト [2024：29-30] をもとに筆者作成

さらに、ゴンザガ・プアスとポール・ダーシーによると、学生や高官を対象とする教育交流プログラムも 2000 年以降に盛んに行われており、100 名を超える学生が中国政府からの奨学金により中国に留学しているという [Puas & D’Arcy 2021 : 288-289]。加えて、筆者と奥田梨絵が論じたように、新型コロナウイルス感染症の流行期には同感染症対策の医療機器や防護服の寄贈をはじめ、中国から大規模な援助がなされた [河野・奥田 2023 : 25]。

八塚正晃によると、こうした中国のオセアニア島嶼部への進出は少なくとも 3 つの要因から成り、中国政府が推進する「一带一路」構想¹³はそれを後押しするものである [八塚 2018 : 3 ; cf. 関根 2023 : 249]。

第一に、「一つの中国」の原則に関わる台湾との関係性である。特に近年では、2019 年にキリバス共和国とソロモン諸島が、2024 年にナウル共和国がそれぞれ台湾と断交し、中国と国交を結ぶなど、中国による台湾からの外交関係の奪い返しの動きは加速している [八塚 2018 : 2]。

第二に、排他的経済水域 (EEZ) における海洋資源への関心が挙げられる。経済発展により海洋資源の国内需要が急速に高まる中国にとって、広大な排他的経済水域を有するオセアニア島嶼部は、漁業や資源開発を通じた経済的利益を見込めるという点で魅力的な場所である [八塚 2018 : 2]。

第三に、地政学的条件が挙げられる。オセアニア島嶼部は、地理的には東アジアや東南アジアの窓口に位置し、軍事戦略上の要所とされてきた。こうした地政学的な条件があるがゆえに、オセアニア島嶼国との外交関係を確立することは、中国にとって軍事戦略的な意義を有する [八塚 2018 : 3]。

これらの事情はミクロネシア連邦の場合も同様である。ただし、ミクロネシア連邦の場合、自由連合協定を結ぶアメリカとの関係が最も重要になるため、中国の海洋進出という問題は、同国の側からみれば、台湾との関係性というよりも、むしろアメリカと中国の狭間での立ち振る舞いという側面が大きい [Puas 2021 : 185-206 ; Puas and D’Arcy 2021]。アメリカとの自由連合協定は当初 2023 年で期限を迎えるとされており、結果的に 2023 年

¹³ 「一带一路」構想とは 2013 年に習近平国家主席が表明した広域経済圏構想のことであり、中国の新たな改革開放政策である。2015 年には「一带一路」が「シルクロード経済ベルト」と「21 世紀海上シルクロード」から成ることが公表され、オセアニア島嶼部は後者に組み込まれていることが判明した [渡辺 2019 : 3-4 ; cf. 河野 2023]。

5月に経済支援の継続が決まったものの、アメリカとの将来的な関係継続は確固たるものではなく、急速に影響力を強めている中国を将来的なパートナーに選ぶという可能性も残されている。

そうした動向を受けて、ポーンペイ州出身の第9代大統領デヴィッド・バヌエロ¹⁴（在任期間：2019～2023年）は、新型コロナ禍をめぐる不安定な政情も相俟って、中国との国交断絶と台湾の承認に言及するほど、激しい中国批判を繰り広げていた〔産経新聞 2023〕。その後、選挙での落選を受けてバヌエロが退任すると、2023年5月にチューク州出身のウェズリー・シミナが第10代大統領に就任した。シミナは中国との良好な関係を再開し、アメリカと中国の双方に配慮するバランス外交を展開している〔日本経済新聞 2023〕。こうした新旧大統領の対照的な政治姿勢からもわかるように、ミクロネシア連邦の対外政治のあり方をめぐっては、中国との関係性が重要な焦点となっている。

2 中国人滞在者に対する否定的な語り——断片的な記録から

外交レベルで取り沙汰される中国の進出は、住民の生活の現場ではどのように捉えられているのだろうか。その点に迫るべく、以下では、このような国際政治の展開が土着の政治に及ぼす影響の一端について、筆者自身による短期調査¹⁵の結果をもとに論じる。

この短期調査の中で、中国の進出の現れとして最初に観察できたのは、州都コロニアに建設された体育施設（写真1）や改修中のポーンペイ州庁舎（写真2）など、中国の援助によって建設・改修された公共施設である。

¹⁴ 日本の新聞やニュースではパヌエロという表記もみられるが、本稿ではよりポーンペイ語の発音に近い表記を採用した。

¹⁵ 筆者によるポーンペイ島での短期調査は、2023年10月27日から11月4日までの期間と2024年9月8日から9月16日までの期間の計2回行った。調査言語はいずれもポーンペイ語である。



写真1 中国の援助により建設された体育施設(2024年9月10日、筆者撮影)



写真2 中国の援助により建設・改修されたポンペイ州庁舎

(2024年9月10日、筆者撮影)

さらに、筆者が2010年代に調査をした際には見られなかった、中国出身者が経営する商店を州都コロニアで確認することができた(写真3、写真4)。食品を中心に中国製の商

品が多く置かれていたことから、統計上は中国からの移民が少ないものの、中国にルーツを持つ滞在者がいることが推測できる。



写真3 中国出身者が経営する商店の入り口（2024年9月9日、筆者撮影）



写真4 商店内に置かれた中国製の食品（2024年9月9日、筆者撮影）

ポーンペイ島民のヨワニス¹⁶（40歳代・男性）によると、中国からの来島者は開発プロジェクトの一環で建築などの労働をするために派遣されることが多く、かれらのほとんどはプロジェクトが終わると帰国するという。ヨワニスは次のように続けた。

「日本やオーストラリアやアメリカはお金を持って来るけど、人を連れてこないから、〔ポーンペイ島民の〕仕事がある。でも、中国人はお金だけじゃなくて〔労働力として〕人も連れてくるから、〔島民には〕仕事がない。それに、車で島を走り回っているから、騒がしい（…中略…）ポーンペイ人とフィリピン人が結婚することはある。だけど、ポーンペイ人と中国人が結婚したという話は聞かない」（2024年9月10日のフィールドノートより）。

さらなる調査が必要ではあるが、ヨワニスの語りからは、ポーンペイ島民の中国人観に、タイド援助（いわゆる「ひもつき援助」のこと）に対する不満が作用している可能性を見て取れる。ここでいうタイド援助とは、中国の企業の受注を条件とし、金銭的・物質的援助のみならず、労働力についても、中国からの提供を前提とする援助の形式である。上記のヨワニスの語りは、タイド援助が現地の雇用を促進しないという、世界各地における批判的な言説を繰り返しているかのようである¹⁷。

ヨワニスのように中国からの一時的な移住者への不満を露わにする一般の島民がいる一方で、国政レベルではミクロネシア連邦の国益を重視する姿勢から同国と中国とのつながりを希求する政治家も少なくない¹⁸。ポーンペイ島における一般の住民の生活世界と国政レベルのやり取りは基本的には分けられているが、筆者がこれまでの研究で示してきたように〔河野 2019a など〕、両者は完全に切り離すことはできず、時として交錯する。

¹⁶ 本節以降の記述における登場人物の名前は、旧大統領のパヌエーロと新大統領のシミナを除いて、仮名である。

¹⁷ タイド援助が現地の雇用創出を生まないという言説はオセアニア島嶼部に限らず、世界各地で確認される。だが、稲田十一がアフリカのアンゴラの事例をもとに「工事建設のため中国人労働者が送られることから、現地の雇用につながっていないという批判もある一方で、中・長期的にはいずれにせよそれは中国との貿易取引の拡大や中国企業の投資拡大につながっていくものであり、製造業や雇用の創出という点で、長い目で見れば肯定的な効果をもたらしているとみることができる」〔稲田 2012 : 57〕と述べるように、こうした援助の効果を正確に評価するには、より中長期的な視野が必要である。

¹⁸ ミクロネシア連邦における政治的な言説共同体の多層性を指摘したイヴ・ピンスカーによれば、政治家や官僚を中心とする国政レベルの言説共同体は、一般の島民の生活世界における言説共同体とは全く異なる評価基準を有するという〔Pinsker 1997〕。

次節では、国政レベルの関係性が持ち込まれた祭宴の事例を提示し、祭宴という場における太平洋の国際政治と土着の政治との関係性を描く。

3 縮図としての祭宴——「村の祭宴」と「国際政治」の出会い

本節では、2023年10月28日に催されたある村の祭宴の事例を提示する。この時期のポーンペイ島では、多数の村で立派なヤムイモの展示を伴う「村の祭宴 (*kamadipw en kousapw*)」が実施される¹⁹。

ある住民がかつて筆者に「来てくれる人こそが大切だ (*aramas kohdo me kesempwal*)」と述べたように [河野 2019a : 156]、「村の祭宴」はどの村でも基本的には外部者に開かれており、他村に帰属する者や外国人なども自由に参加できる。会場は原則として、村首長ないしその近親の屋敷地内にある祭宴堂 (*nahs*) である。本節で取り上げる祭宴のように、祭宴堂に参加者が収まりきらない場合には、外にテントなどが張られることもある (写真 5)。

¹⁹ ポーンペイ島における1年間の儀礼サイクルは、ほぼ雨期に重なる「パンノキの実の季節 (*rahk*)」と乾季に重なる「ヤムイモの季節 (*isol*)」にもとづく。首長国単位で催される「礼の祭宴 (*kamadipw en wahu*)」と村単位で催される「村の祭宴」は、「ヤムイモの季節」の中で最もヤムイモが大きく育つ時期に実施される傾向にある。ただし、「礼の祭宴」の歴史は浅い。ドイツ政庁による土地改革によって最高首長の土地権が否定されたことへの代償として、最高首長に対して年に1度ヤムイモとブタを貢納する義務が成文化されたことによって、「礼の祭宴」は始められた [Petersen 1982 : 35]。



写真 5 祭宴堂の外に設置されたテントの様子（2023年10月28日、筆者撮影）

祭宴堂には中央の地面を囲むようにコの字型の高床がある。以下では入口から見て正面奥にある高床を正面床と表現するが、正面床の奥の中央に首長らが座るなど席次は決められている。正面床の奥間に座る首長らは「貴族（*sohpeidi*：字義通りには〔中央の地面で働く平民を〕見下ろす者）」と呼ばれ、祭宴の実施中はつねに特別な敬意を払われる。

これらの「貴族」に対しては給仕役の男性が飲食物の提供などの世話をする。そのみならず、給仕役らは敬語やその他の作法を通じて、「貴族」らに敬意を表現する。その間、正面床には、時に女性の助けも借りながら、カヴァ樹や石焼きにされたブタ、米袋などの食料品、調理済みの食事などがひっきりなしに運ばれる。正面床は「貴族」へのもてなしの傍ら、さまざまな物財が集積する場となる（写真6）。



写真6 祭宴堂内部の正面床の様子（2023年10月28日、筆者撮影）

祭宴の参加者らはカヴァの樹（*sakau*）²⁰、ヤムイモ、ブタ、調理済みの食事などを持参することが望まれており、参加者が増えるにつれ、会場はそれらの農作物や家畜であふれかえる。この日もカヴァの樹やヤムイモやブタが会場の屋敷地内に次々と持ち込まれた（写真7）。祭宴のプログラムが進行し、村首長ら有力者の演説が終わると、それらの食物は受領者の称号の呼び上げを伴い、最高首長から位階の順に再分配された。その際、称号を位階順に呼び上げるのみならず、「大きな（*lapala*）」物から順に再分配がなされるため、その場の最高位者を頂点とするヒエラルキーが視覚的にも立ち現れる。これは物財の再分配を通じた参加者への敬意表現であり、「大きな」物を受け取った者は「名誉」を実感する。この日の「村の祭宴」も基本的には、位階称号にもとづく敬意表現を基調として進められた。

²⁰ カヴァの樹はオセアニア島嶼部に特有の作物であり、その根から抽出される樹液はオセアニア島嶼部で広く引用されている。祭宴に持ち込まれたカヴァの一部は、祭宴堂の中央の地面に置かれた石台の上で搗かれ、根から出た樹液はココヤシの実の殻製の容器に注がれ、決められた作法と順番で参加者に振る舞われる。残りのカヴァの樹は祭宴の進行に沿って、決められたやり方で参加者に再分配される。



写真7 村の祭宴に持ち込まれたカヴァの樹

(2023年10月28日、筆者撮影)

この日の「村の祭宴」には、通常とは異なる客人が参加していた。筆者との数年ぶりの会話を楽しんでいたポーンペイ島民のクリーノ（40歳代・男性）は、遅れてやってきた一団を見て、がっかりした調子で「祭宴は台無しになった（*kamadipw sakanakanla*）」と言った。その一団とは、中国大使と中国大使館から来た3名の職員の計4名からなるグループであった。

クリーノは筆者にポーンペイ語で上記のような不満を漏らす一方、職員らに親切に接し、「村の祭宴」の概要、特にヤムイモの展示（写真8）やブタの石焼き（写真9）などの「慣習（*tiahk*）」について英語で丁寧に説明していた。



写真 8 村の宴堂で展示されたヤムイモ

(2023年10月28日、筆者撮影)



写真 9 村の祭宴で石焼きにされるブタ

(2023年10月28日、筆者撮影)

他方で、中国大使は祭宴堂の正面床に通され、村首長らと並んで「貴族」の位置に着座した。この日の「村祭宴」には中国大使のみならず、アメリカ大使も招待されていた。さらには、大統領に就任したばかりのシミナや、ウー首長国の副最高首長とその夫人も招待され、かれら全員が「貴族」の席次に座った（図2）。

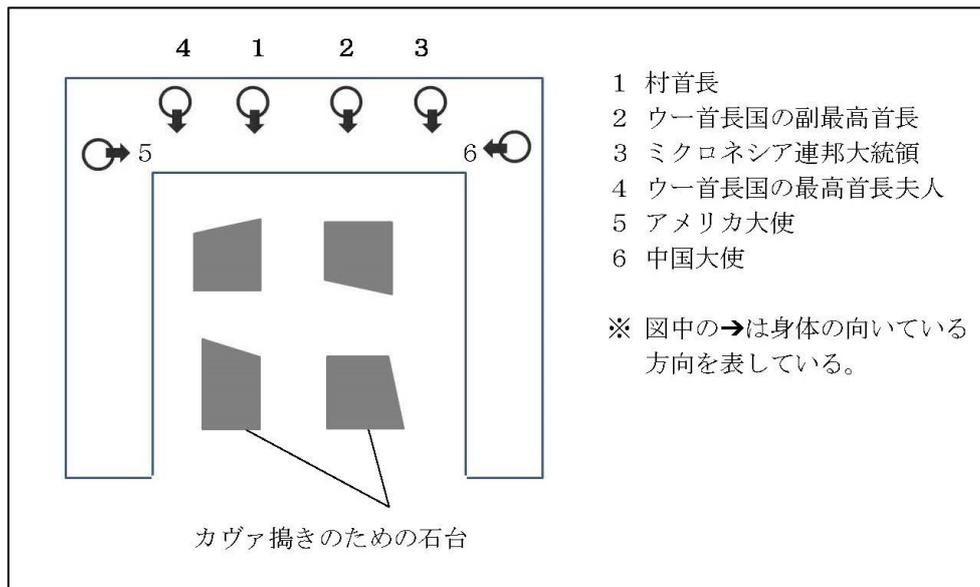


図2 祭宴堂の正面床の席次（筆者作成）

祭宴堂内部の正面床には、ミクロネシア連邦大統領や副最高首長といった国家レベルの指導者が揃い、アメリカと中国の両大使を迎える形になったことから、もはや単なる「村の祭宴」ではなく、むしろ外交の一場面のような様相すら呈していた。給仕役からワインがふるまわれるなど（写真10）、正面床では両大使と大統領へのもてなしが続いていた。



写真 10 中国大使に提供されたワイン

(2023年10月28日、筆者撮影)

両大使やミクロネシア連邦大統領は正面床でもてなされてはいたものの、たとえば英語で演説をするなどの形で前面に出ることはなかった。「外国の側」ないし「政府の側」にあたる政府主催の式典などであれば、かれらがミクロネシア連邦との関係性について演説をするような機会が与えられることもありうる。だが、「ポーンペイの側」ないし「慣習の側」にあたる「村の祭宴」では首長の権威の下に現地の有力者たちがポーンペイ語で演説を行うのが慣例であり、たとえ外国の要人であっても客人らは、その条件の中で歓待されるにすぎない。それでも中国大使と中国大使館の職員の姿を見たクリーノが「祭宴が台無しになった」と嘆いたのは、「国際政治」の主役らが招待され、かれらが過剰に接待されることにより、この祭宴が本来の「村の祭宴」ではなくなってしまったからである。

こうした祭宴のやり方について不満を述べていたのは、クリーノだけではなかった。同じく祭宴に参加した別の村の首長夫人ローマ（60歳代・女性）は、祭宴の翌日、怒りに震えた様子で「大統領って、どういうことなの！？（*dahkot* President!?!）」と大声で叫んで悔しがっていた。

ローマは自身が村首長の夫人であることから、その祭宴に参加すれば、その地位に応じた歓迎をされると考えており、カヴァの樹が自らに再分配されることを特に楽しみにして

いた。しかし、カヴァの樹やブタ肉の再分配の場面において、(本来であれば呼び上げられるべき) ローマの位階称号が呼び上げられることはなかった。ローマは自身の称号が呼び上げられないにもかかわらず、(ポーンペイ島民ですらない) チューク州出身の大統領への再分配がなされているのを目撃し、そのことが彼女の不満と怒りにつながったのである。

クリーノが中国大使館の職員に親切に対応したように、祭宴の参加者はかれらを全く歓迎しなかったわけではない。しかし、ローマが怒りを吐露したように、かれらの存在によって、本来の「村の祭宴」であれば得られていたはずの権利と名声が喪失したのだとすれば、一部の参加者にとって、かれらは「招かれざる客人」であったともいえる。それにより「村の祭宴」が本来の「村の祭宴」ではなくなってしまったことに対して、クリーノやローマは不満や怒りを感じていたと考えられる。

両大使や中国大使館の職員をこの祭宴に招待したのは、ほかでもない村首長のライモンド(50歳代・男性)であった。ライモンドはこの村の首長でもあるが、それ以上に大物の政治家として知られており、翌月に実施された選挙、さらには決選投票を経て、2024年1月にポーンペイ州知事となった。

州知事選挙を控えたライモンドは、自身の「村の祭宴」で選挙演説²¹をするのみならず、ミクロネシア連邦大統領、さらにはアメリカと中国の大使を「招待 (*luk*)」することにより自らの政治的人脈の豊かさを示そうとしたと推測できる。タイミングとしても、中国に批判的なバヌエーロ前大統領が退任し、シミナ新大統領が就任したばかりの時期であり、アメリカと中国双方との良好な関係はアピール材料であったと考えられる。結果としてライモンドは選挙に勝利し、州知事就任後にはアメリカとの関係を維持しつつ、中国とのより良い関係構築を約束した。

この「村の祭宴」では、州知事候補でもあった村首長のライモンドが自身の政治的な立場を表明するための場として「村の祭宴」を選んだことにより、ミクロネシア連邦をめぐる「国際政治」の主要級の人物たちが招かれていた。それにより、中国の海洋進出という太平洋の「国際政治」が村レベルの「土着の政治」に持ち込まれていたのである。

四 結論に代えて——社会集団のスケールをめぐる考察

²¹ ポーンペイ島において、「村の祭宴」のような人の集まる場が、候補者による選挙演説の舞台となることは少なくない (cf. 河野 2019a : 第2章)。

本稿で取り上げた「村の祭宴」では、中国に対する強硬な姿勢が目立っていたバヌエーロ前大統領が退任して間もないタイミングで、州知事候補のライモンドがシミナ新大統領を招いたうえで、アメリカ・中国の両大使を招待した。その構図だけを切り取れば、この「村の祭宴」は、まさに「アメリカと中国の狭間での立ち振る舞い」を求められる、ミクロネシア連邦をめぐる国際政治の「縮図」であるかのように見える。

主人が客人を招待するというやり取りに着目するなら、歓待 (hospitality) に関する文化人類学の議論が参考にできる。とりわけ、集団のスケールという観点から歓待について議論をした文化人類学者のマテイ・カンデアによれば、歓待に関する専門用語——主人、客人、異人など——にはスケールフリーな性質がありつつも、個別的な実践の場において、歓待の行為はその場における具体的なモノや形式と不可分であり、歓待する社会集団のスケールは個々人の行為と物質的・空間的な構成との絡み合いを通じて立ち現れる [Candea 2012 ; cf. 河野 2020 : 46-48]。

本稿の事例に即していえば、「村の祭宴」におけるアメリカ・中国の両大使への招待ともてなしは、ミクロネシア連邦によるホスト国外交の反映に見えつつも、ミクロネシア連邦というホスト国と「村」というホストコミュニティでは、社会集団のスケールは異なる。ただし、カンデアの議論に従うならば、歓待における社会集団のスケールは具体的なモノや形式と不可分である。したがって、「村の祭宴」におけるアメリカ大使や中国大使の招待という出来事は、国家間外交の舞台にはない「村の祭宴」に特有なモノや形式——コの字型の祭宴堂、再分配されるカヴァやヤムイモ、一堂に会する村人の存在——との絡み合いという観点から考察されなければならない。

まず、クリーノは中国大使館の職員に親切に対応していたが、彼の姿勢は国益のために中国とのつながりを維持・構築しようとする一部の政治家の思惑とは異なる。彼の振る舞い自体は中国人の職員がヤムイモの展示やブタの石焼きなどを物珍しそうに見ていたことから生じたものであり、その結果として、クリーノはヤムイモの展示やブタの石焼きなどのポーンペイ島の「慣習」がどのような意味を持っているのかを英語で解説した。その意味で、彼はミクロネシア連邦の代表としてでも、村の代表としてでもなく、ポーンペイ島の「慣習」に通じている「ポーンペイ島民」としてかれらに接遇し、外国人観光客に現地传统文化を説明するような対応を取ったのである。

また、クリーノやローマはミクロネシア連邦大統領や中国大使館の関係者に対して不満を持っていたが、かれらの姿勢も、国益や安全保障の観点から中国の進出に危機感を持つ

一部の政治家とは異なる。むしろ、ローマの反応からわかるように、かれらの不満は、村人を中心とする参加者がカヴァやヤムイモを持参し、再分配されるという、「村の祭宴」に特有な形式との関連で生じていた。つまり、かれらの不満は、ヤムイモやカヴァを優先的に再分配される「貴族」の人数が増えることによって、再分配物を受け取る自身や村人の権利がなくなるかもしれない、結果的に本来の「村の祭宴」ではなくなってしまうのではないかという不安と関連するものであった。そうした物財の再分配をめぐる葛藤²²により、ミクロネシア連邦大統領や両大使、中国大使館の職員らは招かれざる客と一部の参加者からみなされたと考えられる。

それらに対して、祭宴堂の正面床の上では、ポーンペイ島民の首長たちのもとで、ミクロネシア連邦大統領、アメリカ大使、中国大使が食事やワインなどでもてなされていた。ここには、主人としてのポーンペイ州知事候補がミクロネシア連邦大統領や両大使を客人として迎え入れるというやり取りが見て取れる。ただし、ポーンペイ島における祭宴では、歓待すべき相手が外国の要人や伝統的指導者であっても、ポーンペイ島民の首長の権威の下で客人を歓待しなければならない²³ [Kawano 2016]。そのため、ポーンペイ島の祭宴において、ミクロネシア連邦大統領が主人として振る舞うことはありえない。この「村の祭宴」でも主人はあくまで村首長のライモンドである。したがって、正面床でなされていたやり取りも、ミクロネシア連邦というホスト国からのアメリカ・中国大使への歓待ではなく、あくまでポーンペイ州知事候補によるミクロネシア連邦大統領と両大使双方への歓待とみなしなければならない。

以上でみてきたように、この「村の祭宴」はポーンペイ州知事候補の招待によりミクロネシア連邦大統領とアメリカ・中国両大使が一堂に会したことから「アメリカと中国の狭間での立ち振る舞い」を演じるミクロネシア連邦をめぐる国際政治の縮図であるかのように見えつつも、社会集団のスケールの観点からはマクロな政治の構図に還元できるものではない。かといって、州知事選挙という出来事が関係する以上、この「村の祭宴」で生じた出来事を、村のミクロな政治に縮減することもできない。本章で考察してきたように、

²² 物財をだれにどこまで再分配するのかをめぐる葛藤自体は、外部者に開かれているという祭宴の特性ゆえに、通常の祭宴でもつねに起こりうることであり、村人ではない参加者に何をどのように配るのかという問題は時折表面化する [河野 2019a : 225-250]。本稿で取り上げた「村の祭宴」では、優先的に物財を再分配される「貴族」としてミクロネシア連邦大統領や両大使が接遇されていたために、かれらに不満の矛先が向いたといえる。

²³ 逆に客人が首長である場合には主人より権威を持つ「主客」(main guest)として厚遇しなければならない [清水 1985]。

この「村の祭宴」において、歓待する社会集団のスケールは、村の祭宴に特有な物質的・空間的構成との絡み合いのなかで事後的かつ多重的に立ち現れており、これをマクロな政治に対するミクロな政治という単純なスケールの問題に回収することはできない²⁴。

本稿では、オセアニア島嶼部への中国の海洋進出という近年の国際政治の動きを文化人類学の議論の視野に収めるため、既存のポスト植民地研究ではなく、海域アジア・オセアニア研究の立場から予備的な事例研究を行った。本稿で提示した事例からは、中国人の一時滞在者への住民の不満がありつつも、中国とのつながりを希求する政治家の存在ゆえに、国際政治の縮図であるかのような祭宴が開催されていたことも明らかになった。ただし、本章で検討したように、本稿で提示した祭宴の事例は、国際政治の単なる反映とみなせるわけでも、ローカルな村の政治の単なる延長とみなせるわけでもなく、異なるスケールで展開される複数の政治が折り重なるものであった。

したがって、オセアニア島嶼部への中国の海洋進出という新たな動きを捉えるにあたっては、マクロな政治とは異なるミクロな政治をあらかじめ想定するのではなく、それぞれの現場において立ち現れる複数的な政治の関係性を視野に収めることが肝要である。ただし、海域アジア・オセアニア研究にもとづく文化人類学の研究対象は、中国とオセアニア島嶼部の関係性に限られるわけではなく、周辺諸国や周辺諸地域との関係性も考慮されるべきである。今後は、アジアとオセアニアに跨るより多くの国家・地域との関係性も視野に入れつつ、国際政治と土着の政治の結節点で何が生じているのかを民族誌的に深く検証し続ける必要があるだろう。

付記

本稿は、2025年2月11日に国立民族学博物館で実施された2024年度日本オセアニア学会関西地区研究例会（共催：人間文化研究機構海域アジア・オセアニア研究プロジェクト国立民族学博物館拠点・東京都立大学拠点）における口頭発表「ミクロネシア連邦にみる土着の政治と中国の海洋進出——ポーンペイ島における祭宴の事例から」をもとにしている。発表の際には、コメンテーターの須藤健一氏（堺市博物館）と研究例会幹事の藤井真一氏（国立民族学博物館）をはじめとする参加者の方々から貴重なご指摘とコメントを

²⁴ 本章で参照したカンデアは、歓待における集団のスケールについて論じるにあたって、ブリュノ・ラトゥールの議論を援用している [Candea 2012]。ラトゥールによれば、社会事象のスケールは外部の観察者ではなく、現場におけるアクター自身によって打ち立てられるものであり、その意味においてミクロやマクロといったスケールはあらかじめ存在しない [ラトゥール 2019: 352-366]。

いただいた。

また、本稿のもととなった調査研究は、科研費基盤 (B) 「現代アジア・オセアニアにおける他者への想像力と歓待の実践知に関する人類学的研究」(研究代表者: 河野正治、課題番号: 23K25435) の研究資金によって可能となった。ポーンペイ島の住民の方々のご協力と共同研究者との対話なくしては、本研究は実現しえなかった。ここに記して感謝したい。

参考文献

- 飯高伸五 2009 「旧南洋群島パラオにおける日本統治経験の歴史人類学的研究」 東京都立大学博士学位論文。
- 稲田十一 2012 「中国の援助を評価する——アンゴラの事例」 日本国際問題研究所編『中国の対外援助』日本国際問題研究所、pp. 1-20。
- 小野林太郎 2024 「はじめに——モノからみる東南アジア・オセアニアと海のある暮らし」 小野林太郎編『モノからみる海域アジアとオセアニア——海辺の暮らしと精神文化』風響社、pp. 3-5。
- 片岡 修 2009 「考古学からみたポーンペイ島と他島との交易」 吉岡政徳監修 遠藤央・印東道子・梅崎昌裕・中澤港・窪田幸子・風間計博編『オセアニア学』京都大学学術出版会、pp. 94-100。
- 柄木田康之 2000 「ミクロネシア連邦ヤップ州の伝統的首長と政治統合」 須藤健一編『JCAS 連携研究成果報告 2——オセアニアの国家統合と国民文化』国立民族学博物館地域研究企画交流センター、pp. 35-59。
- 2016 「ミクロネシア連邦離島社会の主流島嶼への統合と異化」『文化人類学』81(3) : 485-503。
- 河合洋尚 2024 『南太平洋の中国人社会——客家、本地人と新移民』風響社。
- 河野正治 2019a 『権威と礼節——現代ミクロネシアにおける位階称号と身分階層秩序の民族誌』風響社。—————
- 2019b 「今日の首長制にみる負い目と負債のもつれあい——ミクロネシア連邦ポーンペイ島の事例から」『白山人類学』22 : 39-59。
- 2020 「序——歓待の人類学」『文化人類学』85(1) : 42-55。
- 2023 「フロンティアとしての島嶼世界——海域アジア・オセアニア研究のための予備的検討」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』135 : 1-10。

- 河野正治・奥田梨絵 2023「ミクロネシア連邦にみる新型コロナウイルス感染症の流行と対策——国境再開までの軌跡と2年遅れの「第一波」を中心に」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』135 : 23-35。
- 黒崎岳大 2019「活発化する中国の海洋進出と太平洋の国際秩序の動揺」『パシフィックウェイ』53(5) : 369-373。
- 2022「太平洋島嶼国をめぐる米中対立」『外交』74 : 132-137。
- 在ミクロネシア日本国大使館 2016「ミクロネシア連邦概況」在ミクロネシア日本国大使館ウェブサイト <https://www.micronesia.emb-japan.go.jp/files/000138594.pdf> (2025年2月10日最終閲覧)。
- サーリンズ、M. 1976「プア・マン、リッチ・マン、ビッグ・マン、チーフ——メラネシアとポリネシアにおける政治組織の類型」山田隆治訳『進化と文化』新泉社、pp. 181-221。
- 産経新聞 2023「ミクロネシア大統領、台湾との外交関係模索 中国「賄賂姿勢」に反発」2023年3月16日
<https://www.sankei.com/article/20230316TD3KFGIABO73MVGIDSADOXG7E/>
(2025年3月10日最終閲覧)。
- 清水昭俊 1981「独立に逡巡するミクロネシアの内情——ポナペ島政治・経済の現況より」『民族学研究』46(3) : 329-344。
- 1985「出会いと政治——東カロリン諸島ポーンペイ島における応接行為の意味分析」『文化人類学』1 : 179-201 アカデミア出版会。
- 1989「ミクロネシアの首長制」『国立民族学博物館研究報告別冊』6 : 119-139。
- 1992「ミクロネシア連邦における近代化と伝統」畑博行編『南太平洋諸国の法と社会』有信堂高文社、pp. 133-150。
- 1993「近代と国家と伝統」石川榮吉監修 清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア3——近代に生きる』東京大学出版会、pp. 3-19。
- 1995「名誉のハイアラキー——ポーンペイの首長制」清水昭俊編『洗練と粗野——社会を律する価値』東京大学出版会、pp. 41-55。
- 1999「慣習的土地制度の外延——ミクロネシアの比較事例から」杉島敬志編『土地所有の政治史——人類学的視点』風響社、pp. 409-428。
- 2004「カンザス市地域のポーンペイ人移民——移民コミュニティの形態と形成

- 過程」清水昭俊編『太平洋島嶼部住民の移民経験』一橋大学大学院社会学研究科社会人類学研究室、pp. 181-222。
- スコット、J. 2013『ゾミア——脱国家の世界史』（佐藤仁監訳・池田一人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈訳）みすず書房。
- 須藤健一 2008『オセアニアの人類学——海外移住・民主化・伝統の政治』風響社。
- 関根久雄 2023「開発援助——「地域的近代」の模索」石森大知・黒崎岳大編『ようこそオセアニア世界へ』昭和堂、pp. 247-262。
- 中山和芳 1986「ポナペ島社会における伝統的リーダーシップの変容の予備的考察」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会編『社会人類学の諸問題』第一書房、pp. 54-84。
- 1989「裁判記録からみたポナペ島の土地所有」『国立民族学博物館研究報告別冊』6：203-228。
- 1994「首長制からエスニック・グループへ——ミクロネシア連邦ポーンペイ島民のアイデンティティ」黒田悦子編『民族の会うかたち』朝日新聞社、pp. 85-108。
- 日本経済新聞 2023「ミクロネシア新大統領、シミナ氏就任 台湾傾斜修正へ」2023年5月11日
https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM09C5E0Z00C23A5000000/?_gl=1*11zszfq*_gcl_au*MTM5NTQwNjk0Mi4xNzM1NTU1MTY2*_ga*MTEyMTM5Njg1My4xNzM1NTU1MTY2*_ga_PXS8451SBG*MTc0MTYxMDg5My45LjEuMTc0MTYxMTA1OC40NS4wLjA. (2025年3月10日最終閲覧)。
- 丹羽典生・石森大知（編）2013『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂。
- 則竹 賢 2000「植民地支配下におけるミクロネシア社会の変容——ポーンペイ島とヤップ島の事例より」『民族学研究』65(2)：168-189。
- 前川啓治 2004「国境を越える共同体——ミクロネシア連邦共和国チューク人移民の民族学」前川啓治『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』新曜社、pp. 136-160。
- 町 聡志 2014「「土地の声」の伝統政治と新たな言説空間の出現——ミクロネシア連邦ヤップ州における大型開発計画をめぐる事例から」『日本オセアニア学会NEWSLETTER』109：20-33。
- 松島泰勝 2007『ミクロネシア——小さな島々の自立への挑戦』早稲田大学出版会。

- 八塚正晃 2018「中国の太平洋島嶼国への進出と「一带一路」構想」『NIDS コメンタリー』73 : 1-7。
- 吉岡政徳 1993「ビッグマン制・階梯制・首長制」石川榮吉監修 須藤健一・秋道智彌・崎山理編『オセアニア 2——伝統に生きる』東京大学出版会、pp. 177-194。
- 2005『反・ポストコロニアル人類学——ポストコロニアルを生きるメラネシア』風響社。
- ラトゥール、B. 2019『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』（伊藤嘉高訳）法政大学出版局。
- 渡辺柴乃 2019「「一带一路」構想の変遷と実態」『国際安全保障』47(1) : 1-14。
- Candea M. 2012. Derrida en Corse?: Hospitality as Scale-Free Abstraction. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 18(S1): 76-89.
- Dahlquist, P. 1974. Political Development at the Municipal Level: Kiti, Ponape. In D. Hughes and S. Lingenfelter (eds) *Political Development in Micronesia*, pp. 178-191. Ohio State University Press.
- D'Arcy, P. & L. Mayo 2021. Fluid Frontiers: Oceania and Asia in Historical Perspective. *The Journal of Pacific History* 56(3): 217-235.
- Division of Statistics, FSM Office of Statistics, Budget, Overseas Development Assistance and Compact Management 2012 *Summary Analysis of Key Indications from the FSM 2010 Census of Population and Housing*. Federated States of Micronesia.
- Douglas, B. 1979. Rank, Power, Authority: A Reassessment of Traditional Leadership in South Pacific Societies. *The Journal of Pacific History* 14: 2-27.
- Falgout, S. 2012. Pohnpeians in Hawai'i: Refashioning Identity in Diaspora. *Pacific Studies* 35 (1/2): 184-202.
- Fischer, J. 1974. The Role of the Traditional Chiefs on Ponape in American Period. In D. Hughes and S. Lingenfelter (eds) *Political Development in Micronesia*, pp. 167-177. Ohio State University Press.
- Godelier, M. 1986. *The Making of Great Men: Male Domination and Power among the New Guinea Baruya*. Cambridge University Press.
- Huang, Y. 2017. The Rise of the Elderly Women: Controversy, Hierarchy, and Matriliney

- in Yap (*Wa'ab*), Federated States of Micronesia. Ph.D. diss., University of Virginia.
- Hubbard, C. 2016. Place Out of Place: A Pohnpeian Chiefdom in Kansas City. *Oceania* 86(2): 151-173.
- Kawano, M. 2016 Open Hospitality towards Other Traditional Leaders: Receiving Guests under Chiefly Authority in Pohnpei, Micronesia. *People and Culture in Oceania* 31: 25-49.
- Keating, E. 1998. *Power Sharing: Language, Rank, Gender, and Social Space in Pohnpei, Micronesia*. Oxford University Press.
- Lieber, M. 1984. Strange Feast: Negotiating Identities on Ponape. *The Journal of the Polynesian Society* 93(2): 141-189.
- Lindstrom, L. & G. White 1997. Introduction: Chiefs Today. In G. White and L. Lindstrom (eds) *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State*, pp. 1-18. Stanford University Press.
- Petersen, G. 1982. *One Man Cannot Rule a Thousand: Fission in a Ponapean Chiefdom*. The University of Michigan Press.
- 1997. A Micronesian Chamber of Chiefs? In G. White and L. Lindstrom (eds) *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State*, pp. 183-196. Stanford University Press.
- Pinsker, E. 1997. Traditional Leaders Today in the Federated States of Micronesia. In G. White and L. Lindstrom (eds) *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State*, pp. 150-182. Stanford University Press.
- Puas, G. 2021. *The Federated States of Micronesia's Engagement with the Outside World: Control, Self-Preservation and Continuity*. ANU Press.
- Puas, G. & P. D'Arcy 2021. Micronesia and the Rise of China: Realpolitik Meets the Reef. *The Journal of Pacific History* 56(3): 274-295.
- Riesenberg, S. 1968. *The Native Polity of Ponape*. Smithsonian Institution Press.
- Thomas, N. 1989. The Force of Ethnology: Origins and Significance of the Melanesia/Polynesia Division. *Current Anthropology* 30: 27-41.
- UNDESA 2024. *International Migration Stock 2024*.

<https://www.un.org/development/desa/pd/content/international-migrant-stock>
(2025年2月9日最終閲覧) .

(かわの・まさはる 東京都立大学)

ケニアのチャイナタウン —二つのチャイナタウンとその壁

金 重李

欧米系の華人コミュニティでは、「波が届くところには必ず華人がいる」(There are Chinese people wherever the ocean waves touch) という言葉がよく使われる。アフリカもその例外ではない。私はアフリカのケニアで華僑華人の世界に出会った。

2024年の夏、指導教員が研究代表者を務める科研プロジェクトの一環として実施されたケニア調査に、研究協力者として帯同した。初めてのケニア渡航で、新鮮な気持ちに満ちたさながら空港に着陸し、事前に手配していた運転手に迎えに来てもらった。運転手の車で空港からナイロビ CBD にあるホテルまで移動する途中、よく新聞などの記事で話題になり議論されている中国企業がケニアで建設した高速道路が目に入った。そのような経済的・政治的活動が具体的にケニアにどのような影響を及ぼしているのか、私はその高速道路を走る車を眺めながら考え始めた (写真1)。



写真1 ナイロビ高速道路ゲート (2024年8月14日、筆者撮影)

ケニア到着の 2 日目、換金と電話用の SIM カードの手続きを済ませた後、早速念願のチャイナタウンへ向かった。チャイナタウンはホテルからそれほど遠くなく、Uber タクシーで道路が混んでいなければ 10 分ほどで到着できる。チャイナタウンに近づく途中、中国語で書かれた看板が見え始め、「肯中大院」と書かれた入口も目に入った。中国語でケニアを「肯尼亞」と表記することから、「肯中」はケニアと中国を同時に表現する略語とわかる。「大院」はレストランなどを備えた集合住宅の庭を意味する、ここも中華系エリアの一つだろう。

目的地のチャイナタウンに着くと、まず「中華街」と漢字で書かれた出入り口が目の前に現れた。ケニア人の警備員が手で遮断機を操作しており、運転手のケニア人が車の中で壁の中に入り入れる際、警備員と少し合図を交わしたようだった。中華街は一階建てほどの高さがある壁で囲まれたエリアで、その内部は想像よりも狭く、日本の中華街と比べると壁の存在が開放感を欠く印象を与えた。中には主に飲食店が並び、酒屋やスーパーも見られた。飲食店では中国の有名な料理がメインとなっており、到着したのが午前 10 時半前後だったため、朝食向けの中華まんや麺類のお店が開いていたが、ランチやディナー、夜食向けの BBQ や火鍋店はまだ営業していなかった。営業中の店舗やスーパーに入ると、アフリカ人とアジア人の顔が入り混じっているのが目に入った。ある店長の話によると、中国人以外にも日本やシンガポールの人々がよく訪れるという（写真 2、3、4）。



写真2 中華街の入り口 (2024年8月12日、筆者撮影)



写真3 中華街の壁(外回り) (2024年8月12日、筆者撮影)



写真4 中華街の壁の中(2階から眺め) (2024年8月12日、筆者撮影)

少し歩くと、もう一つの出入り口に着いた。同じく「中華街」と書かれた門があり、ケニア人の警備員が立っていた。そこから外に出て壁の外から「中華街」を眺めてみると、すぐ隣に「唐人街」と書かれた門が現れた。同じく手動式の遮断機がケニア人によって操作されていたが、警備員の服装は「中華街」が全身黒の制服姿だったのに対し、「唐人街」の警備員は軍服のような姿をしていた。興味を持って中に入ると、「唐人街」の規模はやや小さく、飲食店やスーパー、売店があった。なぜチャイナタウンに「中華街」と「唐人街」という二つの名前があるのかをある店の人に尋ねると、それぞれ異なるオーナーがいるためだと教えてもらった(写真5、6)。

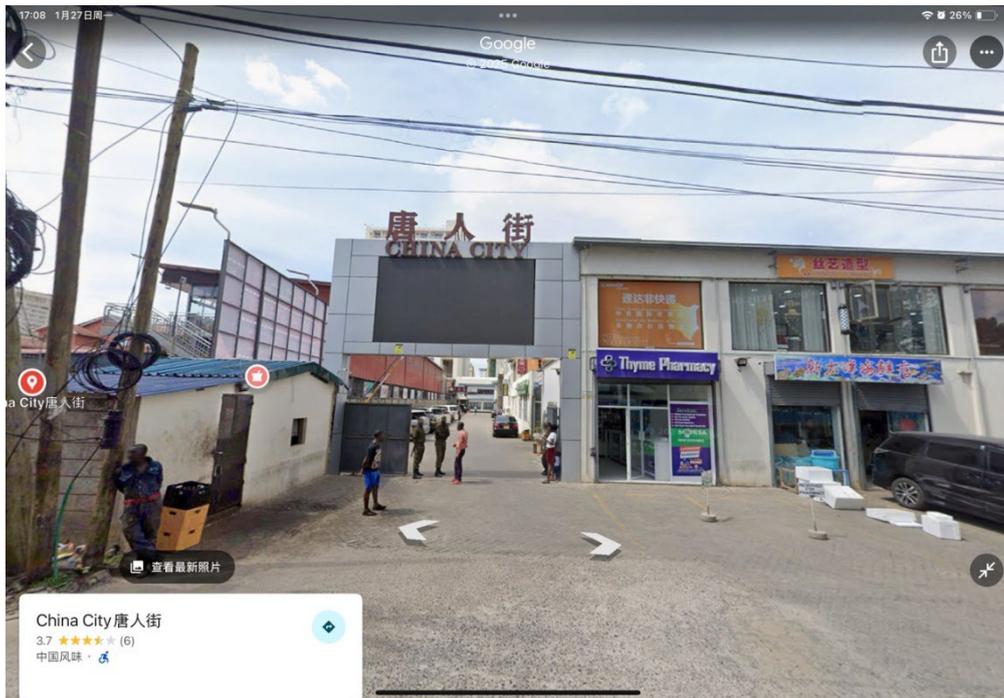


写真5 唐人街の入り口 (Google マップ、2025 年 1 月 27 日閲覧)



写真6 唐人街の中 (2024 年 8 月 12 日、筆者撮影)

チャイナタウンの外にも少し歩き、1キロ以内の範囲で北と東の方向に足を延ばした。周辺にはカジノや高級ホテルが建ち並び、現地のスーパーや商店街も見られた。現地で聞いた話によると、この周辺の建物は中華系の店舗名が付いていなくても、中国の建設会社によって建てられたものだという。それを聞いて、ケニア・ナイロビの街がどこか馴染みのある場所のように感じられてきた。目に見えるチャイナタウンの壁を越えても、目に見えないチャイナタウンの存在を感じ、それもまたどこか目に見えない壁によって他の世界と隔てられているように思えた（図1）。

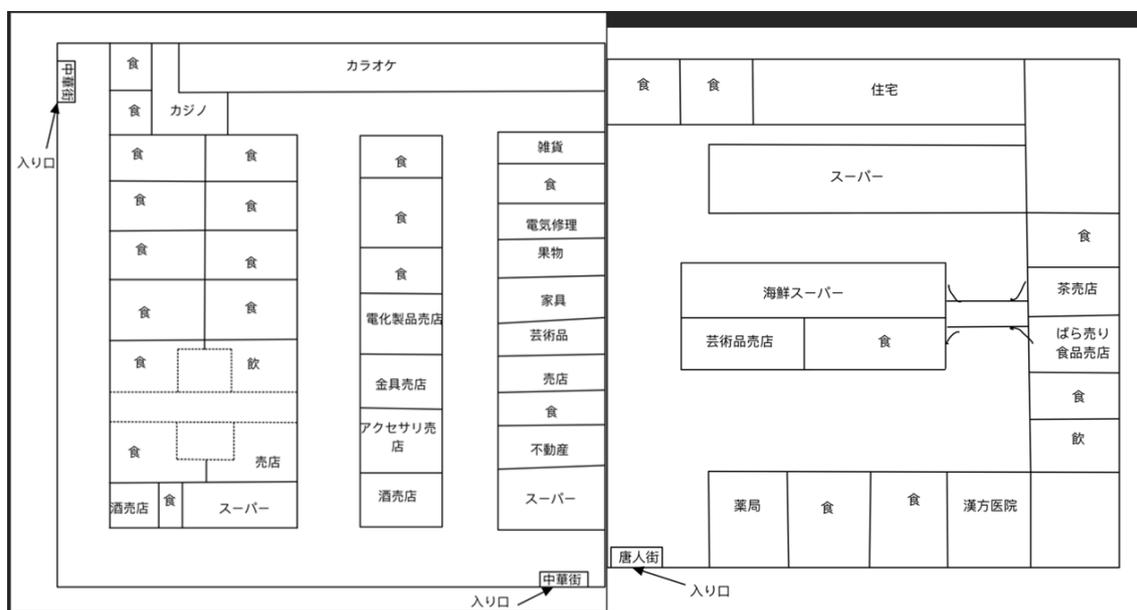


図1 中華街と唐人街の店舗配置図(1F) (筆者作成)

謝辞：本研究はJSPS 科研費 24K00187 (代表：石田慎一郎) の助成を受けたものです。

(じん・じゅうり 東京都立大学大学院)

旧商館に響く音楽

——タイ・プーケットの音響空間

内住 哲生

一 はじめに

チェンマイから飛行機に乗りバンコク、さらにプーケットへ。ちょうど北部のチェンマイ県で長期調査中だった私は、共同調査に合流するため初めて南部のプーケットに足を踏み入れた。同じタイとはいえ、北部山地のやや乾燥した空気とは違う、海辺らしい湿度の高い熱気に包まれ、全くの別世界であることを肌で感じたのをよく覚えている（写真 1）。共同調査としては、観光地として栄えるプーケットにおいて事業を行う人々の「アントレプレナーシップ」のあり方を明らかにすることが目的であった [綾部 2024]。

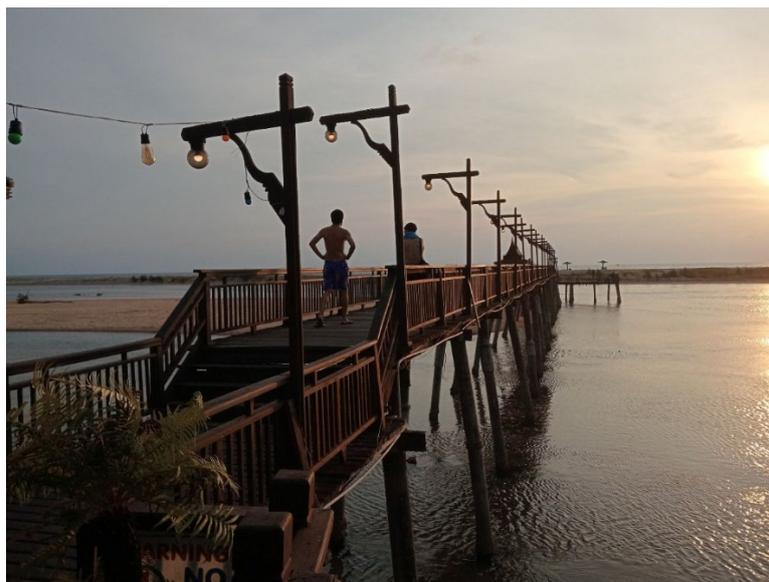


写真 1 プーケットの夕暮れ（2024年3月6日、筆者撮影）

一方、長らく音楽人類学に携わってきた私は、観光地プーケットにおいて音楽がどのように観光資源になっているのかに関心を持ち、プーケット旧市街のライブバーに注目することにした。長期調査を行っていたチェンマイ県でも、市街地は観光地として賑わい、外国人観光客は夜になるとライブバーでナイトライフを楽しむ点は共通している。しかし、その音響空間、ライブバーをとりまく環境は異なっており、調査を進めるうちにそれがプーケット旧市街の成立過程にも深く関係することに気がついた。本稿では、そうした視座からプーケット旧市街のライブバーがどのような音響空間であり、どのような場であるかについて、知り得た情報からごく予備的な考察を行ってみたい。

二 ババ・プラナカンによるプーケット旧市街の形成

ここでまず、マレー半島に位置するプーケットの歴史について触れておく必要がある。19世紀初頭から1世紀ほどの間、プーケットなどシヤム南部の開発を行ったのは、イギリス領マレーのペナンに移住した華人とその子孫だった。1840年代に錫の価格が高騰すると、ペナンを中心として福建系華人の流入が進み、さらにペナンを玄関口として周辺のシヤム南部にも流入が進んだ結果、この地域は錫の採掘と貿易によって発展していった [Khoo 2012 : 300-301]。かれらマレー社会に現地化した華人系の人々はババ、もしくはプラナカンと呼ばれるようになった¹。ババ・プラナカンは福建・マレーだけでなく西洋の文化も吸収し「中国・ポルトガル様式」とも呼ばれるプラナカン様式の商館やコロニアル様式の邸宅を建て、ペナンと同様の景観をプーケットに形成していった [須永 2020]。

こうして形成されたババ・プラナカンのプーケット旧市街の景観は近年再び注目を集めている。2000年代以降プーケットのババ・プラナカンを中心に「タイ・プラナカン協会」

¹ 厳密には「ババ」は中国系男性とマレー系女性の通婚による子孫、「プラナカン」は華人に限らず移民と現地人の通婚による子孫を指すが、マレー半島のプラナカンの多くが華人系で両者が重なることから、煩雑さを避けるために「ババ・プラナカン」と表記する、という須永 [2020 : 164-165] の用法に準じる。

が設立され [片岡 2014 : 9]、さらにコミュニティ・ミュージアムの設立、ストリートアート・プロジェクト、祭礼イベントの創出といったコミュニティ主導の取り組みを経て、2015年には UNESCO の創造都市ネットワーク（食文化）への加盟を果たすなど、ボトムアップの景観保全が興隆してきた。2000 年代後半から、これに呼応するようにプーケット旧市街への観光客も増加傾向にある [須永 2019 : 73 ; 2020 : 166] (写真 2)。



写真 2 プーケット旧市街の街並みと観光客 (2024 年 3 月 3 日、柿倉圭吾撮影)

三 旧商館を再利用したライブバー

私が調査チームメンバーの柿倉（東京都立大学大学院）と訪れたライブバーもまた、プラナカン様式の商館を改築して作られたものだった。内側こそライブバー用に作り替えられてはいるものの、外側には大きな手を加えておらず、それが旧商館であることが明らか

だったのも、先述した景観保全意識の表れと言えよう。そのため、1軒ごとの間口は狭く、奥に長い空間となっている²。これはチェンマイやバンコクではあまり見られない音響空間の利用法である³。この商館特有の細長い空間をどう使うかは、ライブバーによって異なる。図3のように店の奥にステージやモニターが置かれる店もあれば（写真3）、側面にステージが設けられ、より客全体がステージに近くなる配置にしている店もあった。



写真3 プークェット旧市街のライブバー（2024年3月6日、柿倉圭吾撮影）

加えて、これはプークェットに限らず、タイのライブバーは内外の空間を厳密に仕切らないことが多い。そもそも扉がない場合もあれば、扉があったとしても日本のライブバーのように二重扉になっている訳ではなく、遮音性が低いのである。そのため、ライブバーを

² 目測ではあるが間口は10mにも満たず、奥行きは間口の4倍以上はあるだろう。

³ バンコクやチェンマイの場合もプラナカン様式に似た間取りの商館はあるが、そこがライブバーに再利用されることは多くはない。対して、プークェットの場合はそれが大半であった。

探す際も地図を見る必要はなかった。店から漏れ出る音のする方向に向かえば着くのである。

演奏される音楽は、やはり観光客を相手にしているのではほとんどが英語の洋楽であった。これはチェンマイやバンコクのライブバーとも共通している点である。今回の短期調査では具体的な選曲の傾向までは把握しきれなかったが、そう大きな違いはないと思われる。

一方、演奏者には傾向の違いがみられた。チェンマイの場合、演奏者は地元住民や、近隣の北部や東北部出身の演奏者の比率が高いのに対し、プーケットでは地元出身の演奏者はほとんどおらず、寧ろ国外出身の演奏者が目立った。この人は現地の人だろうか…？と問い話しかけた歌手もタイ語が通じず、英語で簡単な聞き取りを行ったところフィリピンから出稼ぎに来ているのだと教えてくれた。マレー半島に位置し 19 世紀から交易で栄えたプーケットは、今もコスモポリスの役割を果たしているのだろう。

四 おわりに

今回の調査ではあくまで断片的なデータに留まっており、演奏者、観光客の出身についてはより詳細なデータが必要だろう。また、建物が密集しており遮音性も低い空間で夜間に演奏することは、近隣の住民にとって騒音にならないのか、というのも今後調査したい点である。とはいえ、プーケット旧市街のライブバーが、その歴史的背景によってタイの中でも特有の音響空間となっていることは示せただろう。

参考文献

綾部真雄 2024 「北のクニから——失意と希望のプーケット」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2 : 54-64。

片岡樹 2014 「「想像の海峡植民地——現代タイ国のババ文化にみる同化と差異化」『年報 タイ研究』14 : 1-23。

須永和博 2019「創造都市としての「ポスト海峡植民地」——タイ国プーケット旧市街地域を事例として」『立教大学観光学部紀要』21：67-82。

——— 2020「「場所の力」を紡ぐ——タイ国プーケットにおけるセルフ・ジェントリフィケーション」『観光学評論』8(2)：161-174。

Khoo Salma Nasution 2012 “Exploring Shared History, Preserving Shared Heritage: Penang’s Links to a Siamese Past” *Journal of the Siam Society*, 100: 295-322.

(うちずみ・てつお 東京都立大学大学院)

アントレプレナーとは誰か？

——タイの「ビジネスパーソン」たちに学ぶ

柿倉 圭吾

国内産業機器メーカーに10年超勤務していた私にとって、アントレプレナーシップ（企業家精神）は疑いもなく現代ビジネスを特徴づける用語であった。しかし、文化人類学がいつも自由にその定義を相対化していることを知り、その振れ幅の広さに感動すら覚えると同時に、少し悩ましくも感じている。何をアントレプレナーシップという概念の中心に据えればよいのかがかえって見えにくくなっているとも言える。

そうしたさなかの2024年3月、私は、指導教員の綾部真雄教授、大学院の先輩である内住哲生氏と3人でタイ・プーケットへフィールド調査に赴いた。修士課程の2年間にわたり研究対象の企業を単独で調査していた私は、フィールドワークのOJTを受けられるとあって、好奇心と、多少の緊張をもって調査に臨んだ。

1週間という短期間ではあったが、自身がアントレプレナーでもあるコーディネーターのエーク¹に加え、合計6人のタイ人のビジネスパーソンへインタビューする機会を得た²。エークの典型的ともいえるアントレプレナーシップについては別の詳報[綾部 2024]に譲るとして、本稿では、2人の起業経験者の対照的な来歴、およびかれらが自身の体験から語る、アントレプレナーシップにまつわるタイの事情をごく予備的に紹介したい（写真1）。

¹ 本文中の個人名はすべて仮名である。

² 5人に対してはタイ語、もう1人に対しては英語でインタビューを行った。タイ語でのインタビューでは、共同調査者である綾部教授と内住氏の通訳を介している。なお、本稿で取り上げる2人へのインタビューはタイ語で行った。



写真 1 左: 私たちを朝食へ案内するエーク(青い服) / 右: インタビューに応じる姉弟

(2024年3月5日、筆者撮影)

姉弟でインタビューに応じてくれたうちの1人、50代の女性セーンは、自身の起業にまつわる成功体験と、タイでの一般的な労働観を教えてくれた。プーケット出身の彼女は、大学で会計学を学び、銀行勤務を経た後、バンコクで従業員3人のクリーニング店を開業した。老齢の母親に会いに時折プーケットに戻ってきており、今回はそのタイミングで応じてくれた。銀行を辞めた理由は、子どもを持ちながらでは銀行員として働くことが難しかったためである。もとより結婚を機に銀行を辞めようと思っていたと語る理由もそこにあるのだろう。時間制約の観点から、子どもを育てながら働ける自営のクリーニング店は好都合であった。それに加え、何か新しいことをしたかったという漠然とした動機がセーンを起業に導いた。

セーン曰く、タイの女性は出産後に何かを始めることが多いという。タイには、女性が働くのは当然という労働観があり、とりわけ女性の場合は、仕事をしていないと社会的地位が低く見られるという。仕事をしていない人とは付き合いたくないとまで言われたことがあると述懐していた。このことが、何か新しいことをしたかったという動機につながっている。

起業に先立つ資金調達については、2つの対照的な考え方を窺い知ることができた。まず、スモールビジネスを開始するにあたっては銀行融資よりも親族から資金を集めるのが主流だという。土地はあるが資金はないといった場合が多く、土地を売って資金を捻出することもままあるとも。一方これとは対照的に、タイには親への仕送りを義務の範疇とみなす言説があり、これを怠れば親不孝(アカタンユ)とみなされるという。一見、この慣行は起業をためらわせるようにも思えた。なぜなら、起業や経営に回せる資金が制限さ

れるのみならず、(仕送りのための) 安定的な収入源を獲得しておかなければならないという制約がついて回るためである。これは、資金繰りを親族に求めるのとは矛盾しかねない慣行にも思えるが、むしろこの制約こそが起業を促しているという。この説明がどの程度一般化可能であるかは定かではないが、経済的な余裕がないから起業しないのではなく、余裕がないからこそ起業して仕送りのための余剰を生み出そうとするのだというロジックである。日本のビジネス慣行に慣れた私にとっては多少理解に苦しむものであったが、最終的には腑に落ちた。日本では、余裕がない中で起業することは稀のように思えるが、たしかに余剰獲得を副業に求めることはありうる。

他方、弟のニットの起業歴には、姉のセーンとは異なる行き当たりばったり感がある。ニットはプーケットに住んでおり、これまでにエビの養殖をはじめ、いくつかの事業を立ち上げてきたがいずれもうまくいかず、現在は無職である。

ニットは、母親の経営していた地元の小さなレストランを引き継ぎ、2019年に廃業するまでその経営に従事していた。事業は、かつては活況を呈し、最大時で50人程度の従業員を抱えていたという。そして、廃業した後にはエビの養殖業に鞍替えした。その動機は、「儲かりそうだから」という至極単純なものである。タイでのエビ養殖事業は世界的にも高い認知度を誇り、一定程度の需要は見込めるだろうが、競合他社がひしめくレッドオーシャン感もまた否めない。事業が軌道に乗るかどうか不安ではなかったかと質問をぶつけてみたところ、ニットは、同業の友人が支えになってくれていたし、その他の友人にも頼ればなんとかなるだろうと思っていたと語った。結局、餌代と浄水費の支出超過、エビの成長不足による売値下落などを理由に、エビの養殖事業も軌道に乗らずすぐに廃業に至った。

興味深いことに、何度も失敗を繰り返しているにもかかわらず——ともすればそれが故に——起業に対して恐れはなかったと語る。「将来のことは考えていない。その日その日を楽しんで生きていこうと思っている」。ただし、こうした楽観的な考えと行動は、ニットが男性であるからこそ可能になっていることなのかもしれない。セーンによれば、タイでは女性により強く親への経済的な報恩を求める風潮が残っているため、女性にとっての起業上の選択肢は、相対的に自由な男性に比してある程度制限されるという。

インタビューを終えた後、セーンが、ぜひ案内したいレストランがあるということで、コーディネーターのエークたちも交えて歩いて向かい、一緒に昼食をとった(写真2)。食後に店内を歩き回り、見慣れない調理器具や料理の作り置き雑多な雰囲気が高揚しながら

ら、ふと、このレストランの経営者も起業を経験しているという点でアントレプレナーなのだろうかという問いが頭をよぎった。

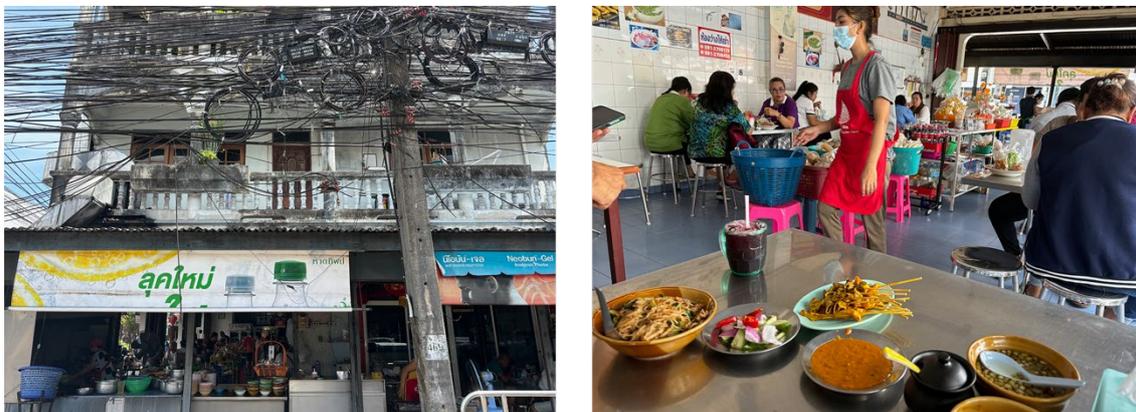


写真 2 左: 姉弟と昼食をとったプーケット市内の路上店の外観/右: 店内風景

(2024年3月5日、筆者撮影)

さまざまな形態のアントレプレナーシップが各地に存在することを知ったのは、仕事を辞め、社会人類学の大学院に進学してからであった。人類学が対象とするアントレプレナーシップは、安定した基盤から次の高みへ挑戦するという、現代ビジネスにおけるステレオタイプ [cf. Liebow & Sunderland 2023 : 109] を所与のものとは捉えない。現在地は問わず、各人が今いる労働環境、今持ち合わせている労働資源に対して、相対的に工夫を凝らして収益を向上／維持する営みをアントレプレナーシップであると付置して議論を展開しているようにも思える。この文脈では、ターゲット市場をグローバルな次元に拡大しての、革新的な科学技術を用いた工夫は必ずしも求められない。あくまでも、自らが埋め込まれた局所的な市場経済における工夫が焦点になるのである。

たしかにこの広い概念は、東京のオフィスで新規事業計画を練るビジネスパーソンにも部分的には投影され、そして人類学の広義のアントレプレナーシップ論へと架橋されていくのだろう。しかし、私は未だにそのことを完全には了解できずに悶々としている。セーソンの場合はまだわかる。では、ニットや、姉弟と昼食をとった路上に店を構える店主はアントレプレナーなのだろうか。文化人類学のレンズを通して見ることで、現代ビジネスを相対化するような包括的な洞察を得られるだろうと理解／期待しつつも、一方で現代ビジネスの文脈でのアントレプレナーシップとの間にはなにか大きな差異があるのではないかと考えてみたりもする。相対的な差に過ぎないとはいえ、差し当たっては、イノベーション

ンに対する志向性の有無や多寡が一つの鍵ではないかと考えている。イノベーションを旨とするアントレプレナーとしての私自身の立ち位置を踏まえ、より奥行のあるデータをこの思考過程に継続的に還元していきたい。

参考文献

綾部真雄 2024 「北のクニから——失意と希望のプーケット」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2 : 54-64。

Liebow, E. & P. Sunderland 2023. Anthropology and Entrepreneurship Research: Introduction to the Themed Essays. *Journal of Business Anthropology* 12(2): 108-113.

(かきくら・けいご 東京都立大学大学院)

ジョホールバルの遊神と無形文化遺産への道

横田 浩一

私は2025年2月13日から19日（旧暦1月16日～1月22日）までマレーシアのジョホールバル¹に滞在し、遊神儀礼を観察する機会を得た。遊神（写真1）とは、神像を神輿や車に乗せて一定のルートを通り巡る儀礼である。通常、華南からの移住者が多数を占める東南アジア華人²社会では、旧暦1月15日およびその前後で儀礼を行うことが多い。今回のジョホールバル訪問は、この儀礼を観察することが主な目的であった。



写真1 遊神の隊列（2025年2月17日、筆者撮影）

¹ ジョホールバルは、マレー半島南端に位置する都市であり、ジョホール州の州都である。南部はシンガポールと接しており、国境を行き来してシンガポールへ通勤する人も多い。

² 華人とは、一般に居住国の国籍を保持する中国出自の者を指す。近年の華僑華人研究では、居住国の国籍を保持しない中国籍者＝華僑と、居住国の国籍を保持する華人とをことさら区別せずに表記する傾向にあり、本稿でも居住地や国籍を問わず、中国に出自を持つと認識する人、される人を華人と呼ぶこととする。

ジョホールバルの遊神は毎年旧暦1月18日から22日までの5日間行われる。1日目は「亮灯(火をともし)」(写真2)、2日目は「洗街(御輿が練り歩くルートをきれいにする)」(写真3)、3日目は「出鑾(御輿の出発)」(写真4)、4日目は「夜遊(夜の遊行)」(写真5)、5日目は「回鑾(御輿の帰還)」である。遊神儀礼の中心舞台は、ジョホールバル旧市街にある柔佛古廟および、そこから3キロメートル離れた郊外にある「行宮」という神像が集められる広場の2箇所である。儀礼の大まかな過程は以下の通りである。1日目の「亮灯」は行宮で実施され、2日目は柔佛古廟から行宮を経由して市内を一周する。3日目にはすべての神像を柔佛古廟から行宮まで移動させ、4日目は行宮を起点に市内を一周する。5日目にすべての神像を柔佛古廟に戻して儀礼は終了する(表1)。



写真2 亮灯。中央の玉に手をかざすと明かりが点灯する(2025年2月15日、筆者撮影)



写真3 洗街。水と米を撒き、遊神のルートを清める (2025年2月16日、筆者撮影)



写真4 洪仙大帝(福建人の神)の隊列 (2025年2月17日、筆者撮影)



表 1 ジョホールバル遊神のルート(2 日目がピンク、3 日目が黒の点線、4 日目が青、5 日目が黄色で示されている) (『柔佛人』2024 年 2 月 26 日より)



写真 5 夜遊の隊列と見物する観衆 (2025 年 2 月 18 日、筆者撮影)

ジョホールバルの華人社会および遊神の特徴は、昨年私が観察したジョージタウンの遊神 [横田 2024] と比較すると以下の点にあると思われる。①マレーシア華人は福建人が多数派であるが、ジョホールバルの多数派華人は潮州人である。②5つの華人方言集団（福建、広東、潮州、客家、海南）が共同で遊神を実施する。③遊神儀礼は5日間にわたって実施され、1日目には前夜祭として「亮灯」に関わるイベントが行われる。また、遊神4日目の「夜遊」では街の中心部にステージが設置され、プロのMCが会場を盛り上げる。伝統的な儀礼というだけでなく、観光イベントとしての側面もあるといえる。

まず①について、マレーシアでは福建人が華人方言集団の中で最も人口が多いとされている。それに続いて客家、広府人、潮州人の順に人口が多いとされ、潮州人は華人の中では11.3%の割合を占める [黄・楊 2023: 159]。つまり、マレーシア華人の中では潮州人は少数派である。しかし、ジョホールバルでは19世紀にこの地の開発を担った華人の9割が潮州人だったとされており [黄・楊 2023: 162]、ジョホールバル華人社会初期の中心となったのは潮州人であった。そのため、儀礼の過程において形式上、最も重んじられているのは潮州人の神である元天上帝（写真6）である。



写真6 先天上帝(真ん中) (2025年2月14日、筆者撮影)

②について、ジョージタウンの遊神で、12年に一度の特別な儀礼以外、基本的には福建人を中心としたものである。一方でジョホールバルでは、毎年の遊神においても5つの方言集団およびその会館が協力関係にあり、遊神の隊列では海南、客家、広東、福建、潮州の神像を順番に担いで練り歩くことになっている（隊列の後方ほど重要とされる）。ジョージタウンとは異なり、ジョホールバルでは1870年頃に柔佛古廟（写真7）が設立された際に5つの方言集団の信仰する神像が並んで安置され、1922年には5つの方言集団の協議によって上記のように一方言集団につき一体の神像を信仰対象とするという体制が形作られた〔莊 2016：257〕。もともとジョホールバルでは、開発の初期に秘密結社同士の争いが激化して争いが生じることをテメンゲン³・イブラヒムが懸念し、1840年代以降、義興会のみが合法的な秘密結社としての存在を許されたという背景がある〔莊 2021：6-7〕。そのため、いくつもの秘密結社が入り乱れたジョージタウンとは異なり、華人方言集団間の争いが顕著ではなかったことが5つの方言集団共同での遊神の実施と密接に関わっている。



写真7 柔佛古廟外観（2025年2月14日、筆者撮影）

³ テメンゲン（*Temenggong*）は、ジョホール王国の警察、治安維持担当の称号を保持し、領土管理権をスルタンから与えられている地方領主である。

③について、現在のジョホールバルの遊神はイベントとしての色彩が強い。もともと遊神は4日間の開催であり、1日目の「亮灯」は2000年に始まった。また、4日目の「夜遊」でも市内中心部のショッピングモールが並ぶメインストリートに舞台を設置してプロの司会者を呼び、大型のオーロラビジョンを設置してイベントを盛り上げる。このステージは「恭迎台」と呼ばれ、2004年から設置された[舒・陳(編) 2010:44]。舞台を設置することで貴賓を招き、遊神やそれに付随する大きな旗を振る出し物や、龍舞、獅子舞を鑑賞してもらうことを目的としている。当日はジョホール州スルタンの王子も招かれて来臨した。

これらに加えて、1日目と4日目には、「携手世遺，共創輝煌（ともに手を取り世界遺産へ、ともに創ろう輝かしい成果）」あるいは「Road to UNESCO」（写真8）というスローガンが司会者から何度も発せられ、観衆もそれに応答してコールアンドレスポンスを要求する場面が何度もあった。ジョホールバルの遊神では「興啊（*heng a*）」、「発啊（*huag a*）」（潮州語）というお決まりの掛け声で祭りのボルテージが上がる⁴。それは司会者がいようがいまいが自然発生的に観衆から発せられるものである。また、司会者が呼びかけた際にも観衆は「興啊」、「発啊」という掛け声に必ず応じる。一方で「携手世遺，共創輝煌」あるいは「Road to UNESCO」というMCの掛け声に対しての反応は芳しくない。

⁴ 「興啊（*heng a*）」は、「盛んになれ」という意味であり、事業などが発展することを、「発啊（*huag a*）」は「豊かになれ」という意味で、金持ちになることを願う掛け声である。発展や豊かさへの祈願が祭りの掛け声に込められている。



写真 8 デフォルメされた神の下に 2025 年のスローガンが見える

(2025 年 2 月 14 日、筆者撮影)

現在、マレーシアのジョージタウン、ジョホールバル、シンガポールは共同で *Chingay* をユネスコの無形文化遺産に申請している。*Chingay* (妝藝：福建語) とは、マレーシアやシンガポールで旧正月に華人が行うパレードを指しており、通常は神の生誕祭を祝う儀礼を伴う。ジョホールバルの遊神はまさに *Chingay* でもある。2025 年 3 月にはユネスコに無形文化遺産としての申請を行い、2025 年末には結果が判明する。そのため、今年(2025 年)のジョホールバルの遊神ではその気運を盛り上げるために行宮でもユネスコへの申請に際して何をアピールしたのか、遊神にどのような価値があるのかをパネルで展示していた(写真 9)。ユネスコの無形文化遺産として認定されることで、自分たちの文化が価値あるものであると認められるだけでなく、経済的な利益をもたらすことも期待されている⁵。一方で、華人団体の関係者や一部の利害関係者以外には、「Road to UNESCO」という

⁵ ジョホール州は 2026 年を「ジョホール観光年」に指定し、文化を経済の推進力とすることを期待している。さらに、飲食、宿泊、交通などの関係する産業にもその恩恵が得られることを目指している。e 南洋「柔佛古廟遊神深層意義/南洋社論」2025 年 2 月 20 日

<https://www.enanyang.my/%E8%A8%80%E8%AE%BA/%E6%9F%94%E4%BD%9B%E5%8F%A4%E5%BA%99%E6%B8%B8%E7%A5%9E%E6%B7%B1%E5%B1%82%E6%84%8F%E4%B9%89%E5%8D>

スローガンはあまり響いていないような印象を受けた。今年のユネスコの申請が首尾良くいくのか、また遊神に直接参加した者、観衆として見物した者も含めて無形文化遺産としての認定がどのような効果をもたらし、遊神を変えていくのか／あるいは変わらないのか、引き続き注目していきたい。

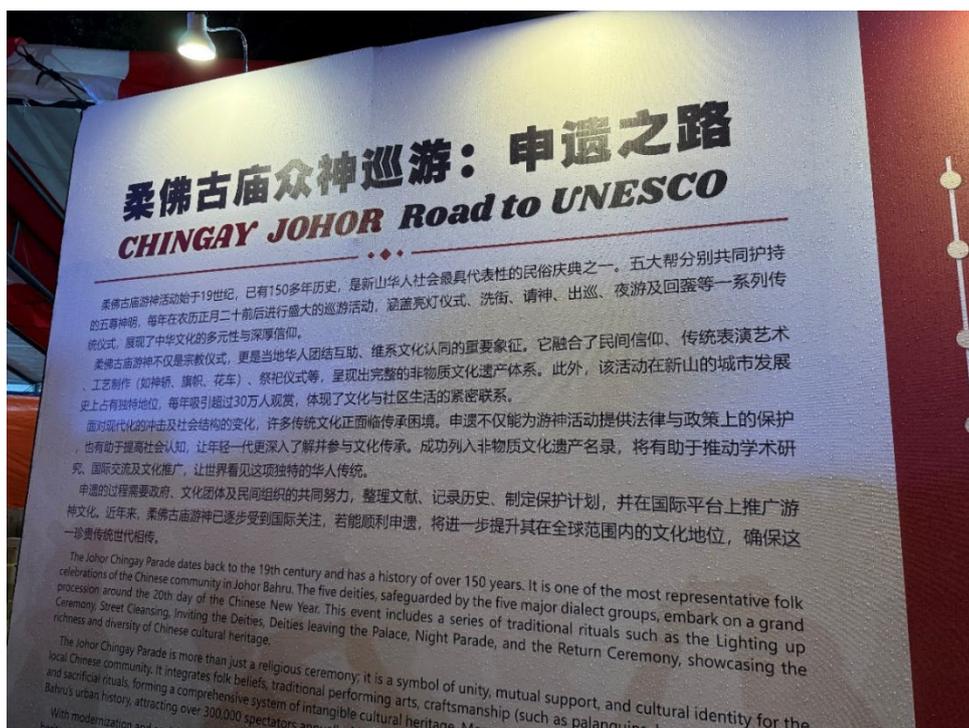


写真 9 行宮に設置されたパネル。ユネスコ無形文化遺産申請の過程が説明されている

(2025年2月15日、筆者撮影)

参考文献

横田浩一 2024「マレーシア・ジョージタウンにおける華人の伝統／文化イベントとしての儀礼 —— 「宝福社甲辰年請火大伯公香花車大遊行」を事例として」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2：1-33。

黄晓坚・楊錫銘 2023『東南亜潮州人研究』北京：中国社会科学出版社。

舒慶祥・陳声洲（編）2010『柔佛古廟百年遊神照片匯編』新山：新山中華公會轄下柔佛古廟管委會。

莊 仁傑 2016「柔佛古廟遊神中的新山客家公會与感天大帝」『全球客家研究』6：253-278

———— 2021 「甲必丹制度的現代変奏——以柔佛古廟遊神為個案」『民俗曲芸』212：1-42。

新聞

e 南洋「柔佛古廟游神深層意義/南洋社論」2025年2月20日。

Web サイト

柔佛人「柔佛古廟游神 新山市数要道封路」

<https://johor.chinapress.com.my/20240226/%E6%9F%94%E4%BD%9B%E5%8F%A4%E5%BA%99%E6%B8%B8%E7%A5%9E-%E6%96%B0%E5%B1%B1%E5%B8%82%E6%95%B0%E8%A6%81%E9%81%93%E5%B0%81%E8%B7%AF/> 2025年3月18日閲覧。

(よこた・こういち 人間文化研究機構／東京都立大学)

三亜にしながら三亜にいない感覚

——中国海南島を再訪して

陳 昭

フィールドへの再訪は、人類学者の究極的なロマンであり特権でもあるが、幾分危険な旅である。過去に出会ったこと、出会っていなかったことへの希求は、往々にして、ただの落胆では済まない「過去」そのものへの懐疑に繋がる。やがて、自分自身にも向けられるその悶々とした不安は次の旅へと誘う麻薬となる。

一 旅立ち

2025年3月14日、新居への引っ越しを済ませ、荷物がすべて解けていないまま、フィールドの旅に出た。広州、深セン、厦門、そして三亜。どの都市でもエッセイで書き切れないほど充実な経験だったが、この旅行記は三亜に絞る。

過去の調査では、デザインのプロジェクトを追いかける中で、海南島の三亜も訪れていた。しかし、当時は時間の制約もあり、三亜そのものへの関心は十分に展開せず、都市はあくまで器のような存在で、ただ通り抜けていた感覚であった。今回は一週間（20日～28日）の滞在しかなかったが、この場所をじっくり見てみようと思気込んでいた。

空港からホテルまでのタクシーの運転手は黒竜江省の出身であった。中国の最北端の漠河が位置する黒竜江省には、中国の長江流域で生まれ育った私はまだ行ったことがない。彼が言うには、中国の最南端に来たのは十数年前のことで、今やふるさとの料理よりは味付けがシンプルな「本地菜 (*bendi cai*)」(地元料理)の方をよく食べているという。顔に当たる暖かい南国の風と、車内で響く北国の訛りが交ざりあい、織り出された「三亜にしながらどこか三亜にない」不思議な感覚が、この再訪の旅を貫くものとなった。

二 公園と都市の更新

「天涯海角 (*tianya haijiao*)」(天地の果て) と呼ばれる三亜は、古くから士大夫の流刑地として知られていた。1980 年代後半から海岸沿いのリゾート開発に乗り出し、近年では市内全域の環境整備に力を入れている。環境にやさしいデザインを謳った公園が次々と建設され、その周囲には旧市街の取壊しに伴い新たな高層ビル群が誕生しつつある。

2015 年に訪れた時には生活廃水で悪臭が漂う水域だったのが、今は綺麗な湿地公園へと移り変わった。その周囲を囲む形で、立ち退き者のための居住区、高級マンション、ショッピングモール、オフィスビルが建ち並ぶ (写真 1、2)。その中でも、2024 年 10 月に開業したばかりの総合商業施設「大悦城」には高さ 208 メートルのタワービル (三亜国際貿易センター) がそびえたち、新しいランドマークとなっている (写真 3、4)。



写真 1 公園の歩道橋から見るビル群 (2025 年 3 月 22 日、筆者撮影)

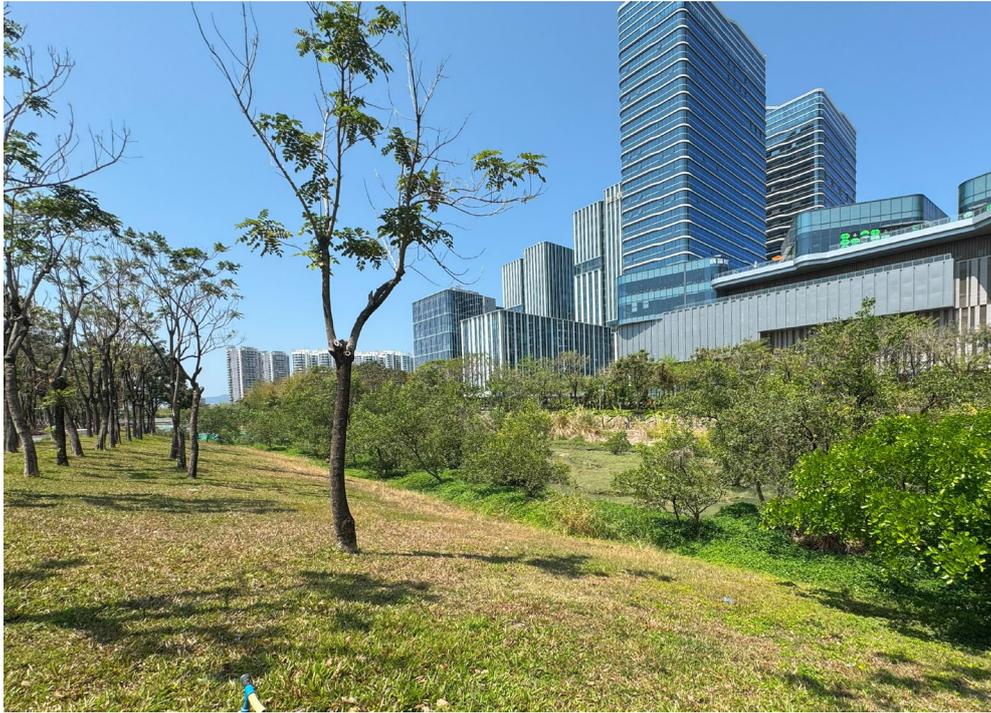


写真2 公園を取り囲む商業施設 (2025年3月26日、筆者撮影)

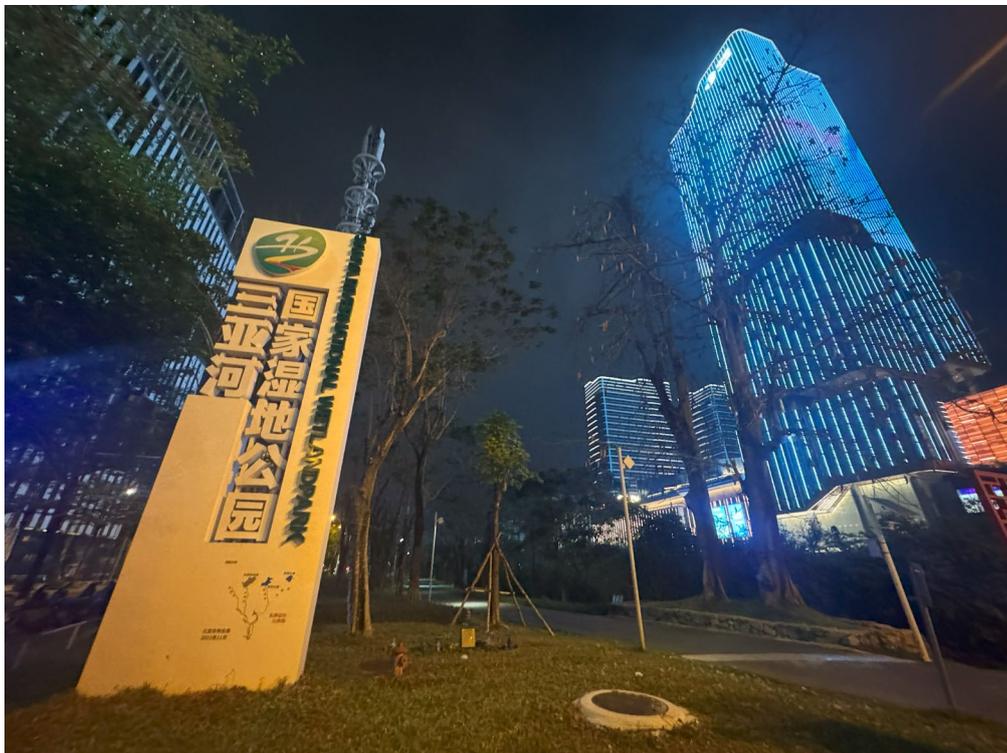


写真3 公園の近くに佇む三垂一高いビル (2025年3月22日、筆者撮影)



写真 4 新しいランドマーク大悦城（2025 年 3 月 22 日、筆者撮影）

建物の高さとともに上がったのは不動産の価格である。話を聞いた近くの不動産屋によれば、公園近辺は他の地域より家賃が高く、三亜市の新しい中心となりつつあるという。2021 年にオープンしたタワーマンション「公園 88 号」は、中国全体の不動産価格が下落傾向を続ける中、100 万円／平米（333 万円／坪）の高い平均単価を保っている（2025 年 1 月）。日本の不動産に容易に換算できるものではないが、単純比較で東京都世田谷区の三軒茶屋の地価に匹敵する水準だとは実に驚いた¹。

三 「渡り鳥」の東北人

¹ 不動産屋の話を知っているうちに、前に住んでいた池ノ上のことに思索が飛んだ。大学のキャンパスが近くにあり、再開発が最中の渋谷と下北沢の間に挟まれることで、近年土地の値上がりが著しい。相続税に直面し、家の世代交代がそのまま土地の売却につながるケースが増えている。5 年間住んでいた前居もその一つで、大家さんが高齢のため施設に入って 3 年後には不動産会社に売却され、取壊しが決まった。オーナーの自宅と同じ敷地に建つ賃貸アパートの前居は、古い木造でネズミの被害に何度も遭わされたが、隣人のイビキで互いの生存確認ができるある意味で暖かさもある物件だった。今後は 4 階建てのマンションになる予定であり、学生には到底無理な家賃になるのだろう。都市更新とは貧困層を追い出すトリックではないかと、退去間際に寂しく思っていた。東京から 1,800 キロメートルも離れた三亜の景観を目の当たりにして、今では複雑な気持ちを抱かずにはいられなかった。

公園の近くの不動産を回っている中、何回も同じ高層マンションの前を通っていると、門番のおじさんに「部屋探しに来たのか」と親切に声をかけられた。「借りるなら今だ」ということらしい。なぜかという、三亜には毎年の10月から4月の間、寒い冬を避けて中国の東北や華北から多くの高齢者が訪れる。10年前は金銭的余裕があれば投資も兼ねて三亜で不動産を購入する者も多かったが、近年の不動産事情を受けて今は賃貸で過ごす方が一般的になっている。空き部屋は2月の旧正月を境目に徐々に増加し、4月～8月（三亜の雨季）の間は家賃が遥かに安くなる。

越冬に訪れる人々を、地元住民は「候鳥（*houniao*）」（渡り鳥）と呼ぶ。確かに、スーパーやレストラン、図書館に至るまで、周りの東北人の多さに驚かされた。三亜には1980年代以降、東北からの移民が増え、1984年の人口調査のデータではすでに黒竜江省出身者が一位であった。1990年代以降は他の地域からの移民も増え始めたが、東北三省が現在も依然として上位を占めている。滞在中に出会った運転手やホテルのスタッフが全員東北出身者であった。それに加えて「渡り鳥」の存在は「三亜にいながらどこか三亜にいない」不思議な感覚に繋がった。

四 華やかさを競う舞台

熱帯サバンナ気候の三亜は夜が本番。19時に湿地公園を訪れてみると、入り口の広場にはすでに様々なダンスの音楽が何重に響いていた。見た限りでは60代以上の中高年層が利用者の大半を占めており、ジョギングやストレッチなどで個別に体を動かしている人々もいるが、団体でダンスなどを楽しむ人々の存在がひととき目立つ。街灯が照らす明るい場所で、それぞれ十数人～数十人のグループとなり、進行体操や新疆舞踊、ヤンコ踊り²、ストリートダンスなどが行われていた（写真5、6）。中国の各地に見られる所謂「広場舞（*guangchang wu*）」（広場踊り）である。主に中高年女性が参加し、体操のような緩い動きをEDM風の伴奏で踊るというのが、広場舞の一般的なイメージだが、新疆舞踊やヤンコ踊りに中高年男性も数多く参加していたことが新鮮だった。

² ヤンコ踊りとは「秧歌（*yangge*）」と呼ばれる民間舞踊であり、特に中国北部の農村部で盛んに行われている。色とりどりの扇子や長い布を手にして振りながら集団的に踊るのが特徴的である。



写真5 進行体操を行う市民たち (2025年3月22日、筆者撮影)



写真6 華やかな服装で登場するヤンコ踊りのグループ (2025年3月22日、筆者撮影)

話を聞いてみると、子供が三亜で働いている関係で移住してきた者もいるが、やはり「渡り鳥」の方が多かった。また同じ地域の出身が集まってグループを成しているようにも見えた。新疆舞踊の参加者は新疆からと口々に言い、ヤンコ踊りの参加者は東北と河南省出身の者が多い。故郷で親しんだ運動を「越冬地」の三亜に持ち込み、服装やメイクアップを揃え、踊りのステップとともに音楽の音量でせめぎ合いながら各自の場を広げている――一夜の公園は華やかさを競う舞台のようだった。

五 異郷で同郷に出会う場

同じ地域出身同士の者がどのように知り合っているかは、旧市街の中心地にある白鷺公園の出来事が一つのヒントをくれた。20年前に建てられた歴史のある公園で、海水と淡水が交ざる水辺にはマングローブ林が茂み、岸辺にはガジュマルの木が広がり、濃緑を飾る幹から垂れ下がる細長い根が森林のように包んでくる。その木陰の下の卓球コーナーは一日中賑わっていた（写真7）。皆仲良く話を交わしている様子だった。スマホで映像を撮りながら立ち寄った私にも、対戦中の一人からやってみないかと誘いが来た。知り合いだと思いついていたペアはなんと今日たまたま初めて会ったという。一人は三亜に来て数十年の人で、もう一人は山東省から出張に来た人だった。以前出張に来た時たまたま公園を通りかかって卓球コーナーを知り、今回はラケットを持参してきたという。別の台でも初めての出会いの場面があり、常連のようなおばあさんが横に座って観戦しているおばさんに、「あなたも遼寧か、我々は同郷だよ、遼寧のどこなの？」と話しかける。こうして三亜の公園は「渡り鳥」たちが異郷で同郷に出会う場となっている³。

³ 他方で親戚や知人など勢ぞろいで一緒に三亜に来るケースも多い。



写真 7 終日賑わう卓球コーナー（2025年3月26日、筆者撮影）

六 また次の冬に

あっという間に滞在の時間が過ぎていった。もっと「地元の人」に出会いたかったと脳内のどこかで語気を強める声がある。あちこち訪問はしたが物足りなさを抱いてしまう自分がある。せめて知識によってその欠落を満たそうと、数日間図書館に足を運んだ。借りたかった『三亜史（下）』が記録上は数冊の所蔵があるはずだが、どれも一ヶ月以上期限を超過したままの未返却。職員は記録を眺めながら、「これは「渡り鳥」が借りたかも、11月や12月に借りられたものなので。そのまま持って帰ってしまったのかな…」。

諦めて地方文献室に移動。ここには三亜に関わる文献が所蔵され、貸し出し禁止だが、公開した政府資料など本屋さんでは扱わない本が揃っている。窓際の席に座り、昨日からの続きで所蔵書物の目録を読む。斜めに80代のおじさんが座っている。一昨日も来ていたが、何らかの持病か、息が詰まるように咳き込んでいる。いつも『リー族略史』⁴（黎族簡史）を手にしてびっしりメモを取っていた。体調がすぐれないのか、しばらくすると

⁴ 三亜には古くからリー族の人々が多く生活している。

いつもより早く退室した。職員さんは「あの爺さんは毎年、冬に来てるよ」と心配そうな顔をしている私を気にしたのかそう言った。

地元政府の退職した幹部か学校の元先生かと思いついてお爺さんも「渡り鳥」だと聞いて驚いた。この新事実を受けとめてみると、彼が『リー族略史』を読むことの意味合いもガラリと変わった。彼も私も「三垂」を求めてここ資料室に来ていたのだ。「この場所をじっくり見てみたい」。旅の欲望はいかに幻想上のものかと気づかされた。これは文化人類学の先人たちが教訓として残したものである。昔は三垂をじっくり見ることができなかったことから、思わずどこにもない「三垂」を想像してしまっていたのだ。三垂とは、過去について書かれた文章にも、地元民か移民かの区別にも還元できない。何らかの形でここにいる人々が、この場所と関わりを持つとする時、この場所を問おうとする時に現れてくるところに三垂はあるのではないか。こうして自覚した時、窓から風が柔らかく頬を撫でていた。

次は冬に来よう。その時、借りたかった本は返ってくるのだろうか。

謝辞：本調査は JSPS 科研費 23KJ1795 の助成を受けたものです。

(ちん・しょう 東京都立大学)

新宿のネオンを巡る

——ネオンライトは東アジアのシンボルとなるか？

神宮寺 航一

近未来のロサンゼルス、立ち並ぶ超高層ビルの下、漢字で書かれたネオン看板の光が降り注ぐ荒廃した街。これは 1982 年のアメリカ映画『ブレードランナー』の冒頭のシーンである。この映画に代表される、テクノロジーの過剰な発達、そしてそれとは対比的に退廃的な人々の未来を SF として描く「サイバーパンク」と呼ばれるジャンルの創作では、ネオンが煌々と輝く繁華街はしばしば日本や東アジア的なものを連想させるアイコンとして機能してきた。「退廃的な未来」の部分の描写に東アジアの表象が用いられてきたことはたびたびオリエンタリズム的であると指摘されてきたが、英語圏の代表的な旅行ガイドブック Lonely Planet の『Tokyo』(第 14 版)の冒頭でも新宿・歌舞伎町のネオンについて触れられている¹ [Lonely Planet 2024 : 4] など、現在でもネオンは日本を含む東アジアの繁華街のイメージと頻繁に結びつけられる。

一方で、実際の日本の繁華街のネオンサインは昭和期に全盛期を迎えた後、環境負荷や景観への悪影響といった問題により 1990 年代頃には減少し始め、21 世紀初頭には絶滅寸前となってしまうていた [小野 2002 ; 横山 2011]。しかし近年では、「かわいい」「エモい」と若者を中心にネオンの魅力が見直され始め、ネオンだけを集めた展覧会も開かれるなど、「ネオンブーム」とも言える状況になっているのだという [井口 2023]。そしてネオンブームは、韓国や中華圏など日本以外の東アジアの国々でも起こっているようだ。

そこで本稿では、海外からの観光客で賑わう東京都の新宿地区を、新宿駅周辺から東アジア系の店舗が連なる新大久保駅まで「ネオン」に注目して歩き、ネオンブームのいまを報告する。なお、前述の問題などから近年のネオンサインはネオン管ではなく LED を用いてネオンに似せたものが殆どを占めている [井口 2023]。本稿では便宜上、これらのネオン管風の電飾全体を指し、「ネオン」とする。

¹ 「東京は、あなたを完全に虜にしてしまう都市であろう。私は新宿の靖国通りに立ち、夜が訪れ、歌舞伎町のネオンライトが点灯し始めるのを見たその時が、この街に心を奪われたしまった瞬間だった」 [Lonely Planet 2024 : 4] 和訳は筆者による。

JR 新宿駅西口を降りるとまず、西口の家電量販店の大きな看板が目に入る（写真 1）。このネオンは昭和期からあるもので、繁華街・新宿の象徴として写真に収める外国人観光客も多い。また、新宿駅周辺では、ラーメン店、古着店、居酒屋などの看板に、ネオンが多く使用されていた。グルメサイト『食べログ²』の情報によると、それらの店舗の多くはここ 10 年以内に開業したようだ。中でも、駅東南口近くの大きな龍のネオンが歩行者の目を引いていた（写真 2）。2022 年に開業したこの飲食店街の店内は、非常に多くの香港風のネオンの光で彩られていた。



写真 1 新宿駅西口近くの家電量販店（2025 年 1 月 17 日、筆者撮影）

² 食べログ <https://tabelog.com/> 2025 年 5 月 21 日閲覧



写真 2 新宿駅東南口近くの飲食店街（2025 年 1 月 17 日、筆者撮影）

歌舞伎町周辺では、ディスカウントストアの大きなネオンが特に目を引く（写真 3）。筆者の記憶の限り、この店舗のネオンは 20 年以上前から存在しているものである。一方で、2024 年に開店した中国料理店（写真 4）、同年開業の水タバコ店（写真 5）などの新しい店舗でも巨大なネオンが輝いていた。また、2023 年に開業した「東急歌舞伎町タワー」の館内にも多くのネオンが飾られ、2 階の飲食店街には香港の街並みをイメージしたものが、3 階のゲームセンターにはキャラクターをモチーフとしたものなどが数多く展示され、どちらの店舗もインバウンドの観光客で賑わっていた。



写真3 ディスカウントストアのネオンは中国語で「安いスーパー」韓国語で「激安市場」と書かれている(2025年1月17日、筆者撮影)



写真4 中国料理店 (2025年1月17日、筆者撮影)



写真5 水タバコ店 (2025年1月17日、筆者撮影)

次に、多国籍タウンとして知られる JR 新大久保駅周辺を歩いてみる。新大久保駅東側のエリアには韓国系の店舗が多いが、それらの店舗には非常に高い密度でネオンの装飾が施されていた。化粧をする女性(写真6)やお酒を飲む蛸(写真7)など趣向を凝らしたネオンが多く、ネオンをテーマにしたというカフェもあった(写真8)。韓国では、ドラマ『梨泰院クラス』の影響により2016年頃からネオンがブームになり始め、日本でのブームも韓国のネオン人気の一つの要因であるようだ³。

³ 朝日新聞デジタル 2021年10月20日「ネオンサイン、街に増殖中 その理由は韓流に？」
<https://www.asahi.com/articles/ASPBH7268P55PQIP001.html> 2025年1月27日閲覧



写真 6 韓国料理店の化粧をする女性のネオン（2025 年 1 月 8 日、筆者撮影）



写真7 韓国居酒屋のお酒を飲む蝮のネオン（2025年1月17日、筆者撮影）



写真8 ネオンをテーマにしたカフェ（2025年1月24日、筆者撮影）

JR 新大久保駅の西側には中華系の店舗が多く存在するが、ここでも多数のネオンが飾られていた。ある中国料理店の店内には、店で提供される料理名や中国の縁起物などをモチーフとしたネオン装飾が飾られ、異質な雰囲気形成されていた（写真 9、10、11）。中国でもネオンはブームで、この店舗のように中国の伝統的な意匠を現代風にネオンでアレンジした装飾を施すレストランは、若者に大きな人気を集めているのだという [東京ディープチャイナ研究会（編） 2022 : 23]。



写真 9 中国料理店の店内（2025 年 1 月 8 日、筆者撮影）



写真 10 中国料理店の店内 (2025 年 1 月 8 日、筆者撮影)



写真 11 中国料理店の店内 (2025 年 1 月 8 日、筆者撮影)

本稿で取り上げた施設の中には外国人観光客向けにネオンを展示していることをメディア取材などで明言しているところもあり、ネオン増加の要因の一つがインバウンド客の増加であることは間違いない。一方でここ数年に設置されたネオンは、インバウンド客が思い描くであろう「退廃的な未来」のイメージを内面化したものというよりはむしろ、ポップでかわいく、明るさを強調するものであるとの印象を筆者は受けた。その傾向は、韓国や中華系の店舗でも同様である。いまはまさに、日本や東アジアの冷たい繁華街のイメージのアイコンとして描かれてきたネオンを、東アジアの様々な国々の人々が自らの手で洗練させている途上の段階にあるのかもしれない。桜や富士山、キムチやチマチョゴリ、パンドや万里の長城など、東アジアの人々が自らの国の文化を表す際に多用されるアイコンは数多いが、東アジアをまたいだシンボルとしての「ネオン」が人々に愛される未来を、筆者は思わず想像した。

参考文献

井口エリ 2023「実はネオンは“絶滅危惧種”、アオイネオン荻野さんに聞く、文化や技術を残すために必要なこととは」『CEMEDYNE Style』2023年3月27日ウェブ記事 https://www.cemedine.co.jp/cemedine_reports/aoineon.html 2025年1月21日閲覧

小野博之 2002「ネオンサイン・イルミネーションの歴史」『照明学会誌』86(4): 227-232。
東京ディープチャイナ研究会(編) 2022『東京ディープチャイナ ガチ中華セレクション』産学社。

横山 巖 2011「サイン(屋外広告など)」『照明学会誌』95(8B): 554-555。

Lonely Planet 2024 *Tokyo*. Lonely Planet Global Limited.

謝辞: 本研究は JSPS 科研費 JP24KJ1856 の助成を受けたものです。

(じんぐうじ・こういち 東京都立大学大学院)

「おが丸」出港時に鳴り響く見送り太鼓

——小笠原諸島父島における出会いと別れの物語（その2）

李婧・河野正治・横田浩一

「おが丸」出港時の名物——見送り太鼓への注目

筆者らが前号に寄稿したエッセイでは、小笠原諸島父島の生活世界が「陸域」でも「空域」でもなく、まさに「海城」によって形づくられていることを紹介した [河野・横田・李 2024]。父島の文化的特徴はこうした海を跨ぐ人とモノの移動と切り離せない。前号でも触れた南洋踊りは小笠原住民とミクロネシア住民との出会いにルーツがあり [小西 2019]、父島の伝統的なカヌーは、1830年代に持ち込まれたハワイ型カヌーを小笠原住民が改良したものである [後藤 2010]。果皮が薄く酸味がまるやかな「島レモン」は、ミクロネシアから八丈島を経て小笠原に定着した果物であり、今では父島の特産品として知られている¹。このような海を越えた文化混雑を背景に持つ父島の名物として、本エッセイでは、八丈島にルーツを持ち、「おが丸」出港時に披露される見送り太鼓を取り上げたい。

本エッセイの筆者の1人である李は、父島に来島する以前から見送り太鼓を楽しみにしていた。李自身、東京都王子を対象とする都市祭礼研究 [李 2022] に取り組む過程で王子の「太鼓の会」に入会し、盆踊りや夏祭りの時に太鼓を叩いてきたからである。

以下では、このような李自身の個人的な背景も交えつつ、父島の見送り太鼓がどのような太鼓演奏であるのかを紹介する。

出港時に披露される見送り太鼓

祭りや盆踊りの際によく太鼓が披露されているというイメージを持つ方は、少なくないかもしれない。たしかに、父島で11月初旬に実施される大神山神社例大祭でも太鼓の出番はある（写真1）。だが、この例大祭におけるメインは、あくまでも囃子の演奏である。むしろ、太鼓がメインとなる機会は祭りではなく、「おが丸」の出港日の見送り時である。

¹ 東京都産業労働局「TOKYO イチオシナビ——見つけて活かす東京の地域資源」
https://www.chiikishigen.metro.tokyo.lg.jp/introduction/details/introduction_46.html 2025年1月31日閲覧



写真 1 大神山神社例大祭で演奏される小笠原太鼓（2024年11月3日、李撮影）

前号でも述べたように〔河野・横田・李 2024〕、「おが丸」は数日に1便しか運航しないため、二見港からの出港もほぼ1週間に1便のペースである。ゴールデンウィークの前後や7月と8月のハイシーズンに便数が増えることを考慮に加えても、年に60回程度の出港しかない。とはいえ、見送り太鼓はほぼ全ての出港時に披露されており、1年間で60回も披露の機会がある。この演奏状況は、少なくとも李の調査地である王子で太鼓が披露される機会と比べると、かなりの頻度となる。

「おが丸」の出航時刻は決まって15時00分である。出航の20分前頃になると、二見港待合所と「おが丸」との間のスペースに、およそ7～8名の演奏者が半纏姿で登場し、太鼓を並べ始める（写真2）。並べられる太鼓の数は、時期によって異なる。3月下旬には進学や転職などを理由に島を去る者も多いため、5台もの太鼓で見送りがなされる。それに対して、11月などの閑散期には、3台しか太鼓を出さないこともある。このように、太鼓の数や演奏者の人数は一定ではなく、「おが丸」の乗船者数や、乗船者と住民との関係性によって決められるのである。



写真 2 見送りを準備する小笠原太鼓 (2024年3月10日、李撮影)

14時50分頃になると、太鼓の演奏が始められる。太鼓の音は遠くまで響きわたる。そのため、太鼓の演奏が始まる瞬間には、二見港を賑わせていた人の話し声や笑いもピタリと止まり、力強い太鼓の音に耳をそばだてる。見送り太鼓は始まりからテンポが速く、迫力満点で「おが丸」の船内まで響く。太鼓の音を聞いて、船内からデッキに出てくる乗船者がいるほどに聞き応えがある。このように印象に残る演奏だが、実際の演奏時間はわずか3分ほどである。演奏の最後に、演奏者は太鼓の鉢を振りながら、「おが丸」に向かって「いってらっしゃい」と声を張り上げる。この動作により見送り太鼓の演奏が完了する。

「自由に叩いていい」見送り太鼓

李自身、東京都王子で太鼓の稽古をする際、かなりの苦勞をしてきた。なかでも、「最初に決めた振りしかしないで」という太鼓の師匠の教えは絶対であり、この掟に従わなければいけない。王子で披露される太鼓は1人演奏となる盆踊りを除き、「組太鼓」を基本とする。そのため、演奏者は一列になって同じ振りで太鼓を叩かなければならず、見栄えを意識してか、挙げる手の高さなども揃えなければならない(写真3)。



写真3 李(右)が王子で太鼓を叩く風景

(2024年8月4日、李の知人による撮影)

李は中国出身で東京に長く暮らし、王子という場所で太鼓の稽古を続けるなかで、太鼓の叩き方や演奏時の所作を身につけてきた。そのような身体感覚からすると、父島で披露される見送り太鼓は、李がこれまで付き合ってきた太鼓とは全く異なるものであった。

見送り太鼓は、八丈島太鼓由来の2人組みの両面打ちで、上打ち・下打ちと分かれる。下打ちは締め太鼓（リズムをコントロールする小さい太鼓）ベースのリズムを叩くのに対して、上打ちは自由に叩くことができる。ジャズの即興のように2人組で互いに呼応しながら、掛け合いのような雰囲気の中で叩く。一定のリズムがあるにもかかわらず、叩いた音や演奏者の振りには個性が見られ、その意味で即興的な演奏である。

このような即興性は、決められた型を比較的重視する王子の太鼓ではなかなか見られない。李は普段と異なる太鼓を目で見るだけでなく経験したいと思い、「おが丸」出港日の翌日と翌々日に行われている見送り太鼓の稽古へと足を運び、実際に鉢を持って叩いてみた。太鼓の稽古の場自体はオープンな雰囲気でも、太鼓のメンバーのみならず、観光客などが訪れることもある。

初対面のメンバーと一緒に太鼓を叩くこともあり、鉢を手で持つ瞬間、李は緊張を覚えた。しかし、周囲のメンバーからの「自由に叩いていいから」という声に励まされ、徐々に締め太鼓のリズムに合わせて叩けるようになった。李のみならず、メンバーの技と振りも人それぞれであったが、結果的に一体感のある演奏が成立していた。

叩き終わった後、李は父島の太鼓に対して、王子の太鼓とはまた異なる魅力を実感していた。「最初に決めた振りしかしない」王子の太鼓の良さもあるが、「自由に叩いてよい」父島の太鼓の良さもある。両者を比べて、はじめて父島の太鼓の即興さを実感できたし、そのような「自由さ」があるから、この島に縁がなかった李にも、太鼓を叩かせてもらうチャンスが訪れたのかもしれない。

今後、李自身は父島の太鼓により深くかかわっていきたいと願っているし、その太鼓の「自由さ」がどのような演奏を可能にするのかという点に迫りたいと考えている。このような取り組みも含め、筆者らは自他の比較も交えながら、「海域」によってつくられる父島の生活世界の特質についてさらなる探求を続けていきたい。

付記

本エッセイは、李が執筆した草稿に、河野・横田が加筆・修正を加えたものである。父島での現地滞在は、2024年3月9日から2024年3月19日までの期間と2024年11月1日から2024年11月4日までの期間に計2回実施し、いずれも人間文化研究機構海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点からの支援によって可能になった。筆者らを2度もあたたかく迎え入れてくださった父島の住民に感謝申し上げたい。

参照文献

- 河野正治・横田浩一・李婧 2024「新たな時を告げる「おが丸」出港——小笠原諸島父島における出会いと別れの物語(その1)」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』2: 173-178。
- 後藤 明 2010「環太平洋海域の伝統的船舶技術の交流について——小笠原・八丈島のカヌー漁船を題材に」『神奈川大学国際常民文化機構年報』1: 75-82。
- 小西潤子 2019「小笠原に伝播した歌——時間と空間を超えたミクロネシアの混淆文化」石森大知・丹羽典生編『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』明石書店、pp. 307-311。
- 李 婧 2022「「ものがたり」と「ものづくり」からみる都市祭礼の持続——東京都北区王子における「狐の行列」の事例から」『生活学論叢』41: 1-14。

(り・せい 東京都立大学／かわの・まさはる 東京都立大
学／よこた・こういち 人間文化研究機構・東京都立大学)

【書評】 畑中幸子著『南太平洋の環礁にて』

——華人 - ポリネシア人関係からの再読

河合 洋尚

畑中幸子

『南太平洋の環礁にて』

岩波新書、1967年

海域アジア・オセアニア研究から再読する

2022年度より人間文化研究機構のグローバル地域研究の一環として海域アジア・オセアニア研究プロジェクトが始動した。このプロジェクトの趣旨は、太平洋という「海」を中心に据えることで、アジアとオセアニアの連環世界を捉えることにある。言い換えれば、アジアとオセアニアを「地続き」ならぬ「海続き」として理解することが、海域アジア・オセアニア研究の趣旨であるといえる。

そのような連環世界を捉えるのに適した事象の1つが、オセアニアにおける「中国」世界の浸透と拡張である。オセアニアは、しばしばオーストラリア先住民と西洋人のせめぎあいの場として民族誌で描かれてきたが、他方で、中国、日本、韓国、フィリピン、インドネシアなどアジア各国からの移民の波を受け入れてきた地でもある。とりわけ中国系の華僑は少なくとも19世紀以前から交易などの理由でオセアニアを訪れていた。19世紀半ばになると、彼らはプランテーション労働や商売などの目的で、オセアニアの島嶼部各地で定住しはじめた。

オセアニアの中国系移民を研究する学問領域として、華僑華人研究がある。オセアニアの華僑華人研究はそれほど多くはないとはいえ一定の蓄積があるが、この学問領域自体が「中国系移民」を主人公にする傾向があるといえるだろう。それゆえ、中国系移民を主人公としないオセアニアの民族誌は——たとえ中国系移民がたびたび登場するものであっても——華僑華人研究とは通常はみなされない。中国由来の日用品を使い、中国料理を日頃から食べるという状況は、今のオセアニアでは珍しくないが、それも華僑華人研究の対象にはあまりなっていないといえる。

だが、オセアニアの民族誌を読んでいくと、なかには中国系移民とのやりとりや中国由

来の物質について丹念に描かれている重要な研究もいくつかある。そうした先行研究を再評価していくのも海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの課題の1つである。畑中幸子が1967年に刊行した『南太平洋の環礁にて』は、そのような古典書の1つである。

畑中は、フランス領ポリネシア（以下、タヒチと简称）のプカルア環礁やニューギニアを調査した人類学者であり、翻訳書にマーガレット・ミードの『サモアの思春期』（山本真鳥との共訳）がある。『南太平洋の環境にて』は、著者のプカルア環礁での調査経験を描き出した文庫本であり、難関な専門書の類ではない。筆者も学部生の時に本書を読んだことがあるが、当時は本書を南太平洋における人類学の調査紀行と認識していなかった。だが、後に芹澤知広先生（現・天理大学教授）に薦めていただき再読したところ、この本が中国や華僑華人研究に従事してきた者にとって価値の高い一冊であることに、改めて気づかされた。

『南太平洋の環礁にて』にみる中国系移民の描写

まず初めに本書の章構成をみていくとしよう。各章のタイトルは次の通りである。

- I ポリネシア人を探しに行く——フランス領ポリネシア
- II コブラが先か人間が先か——タヒチ島からプカルア島へ
- III 他人のものは我がもの——小さなコミュニティ(人間集団)
- IV 時間が流れない——荒涼たる世界
- V 招かれざる客——人間の偉大な生命力
- VI 太陽はプカルアをめぐる——人間は年をとらない
- VII 思いついたら最後——一文なしの放浪の旅

一目見て分かる通り、本や各章のタイトルには「中国」「華僑」「華人」の文字が一つもでてこない。前提として、本書はタヒチの華僑華人を対象とする民族誌ではない。しかしながら、本書は、著者がプカルア環礁で知り合った李寿やその家族とのやりとりに相当なページ数が割かれている。

李寿は、プカルア環礁で商売を営む現地の富裕者であり、畑中が調査時に住んでいた家を貸借した人物でもある。畑中によると、李寿は中国広東省の出身で、1914年に香港を出て神戸、ハワイ経由でクック諸島のラロトンガに行ったが、そこには2人しか華僑がいなかったため居住が許されなかった。そこで、自由に出入りができ、また母方の従兄である

張文禎がいたタヒチに移住した [畑中 1967 : 99、 129]。李寿は、この本が刊行された時点で 70 歳半ばを超えていると書かれていることから、1890 年頃の生まれであると推測される。タヒチでは 19 世紀半ばに綿花プランテーションの労働者が数千人規模でタヒチに来島したが、プランテーション経営が破綻すると大多数の中国人が帰郷した。現在のタヒチの中国系住民の祖先は 20 世紀前半に商売目的で広東省から移住した商人であり、その移住の第一波が 1909 年から 1914 年にかけてであった [cf. 河合 2024 : 14-15]。李寿はこの第一波に乗じて移住した中国系移民であるといえる。

この本が興味深いのは、タヒチで多くの中国系移民が集まるタヒチ島やライアテア島ではなく、中心部から遠く離れたプカルア環礁のトゥアモツ諸島を対象としていることである。李寿は、しばらくタヒチ島にいた後、従兄の張文禎や弟の李綿棧の商売を引き継ぐために、1944 年にプカルアにやってきた。李寿はプカルアの土を踏んだ 5 人目の中国人であった。李寿を含む 5 名のうち 4 名がプカルアの地で定住し、子孫を残した。一見したところプカルアの全島民が純粋なポリネシア人のようだが、実のところ中国系の血が混じっている人びとがすでにそこに住んでいるのだと、畑中は指摘する [畑中 1967 : 129-130]。

畑中は、李寿とその家族の観察を通して、プカルアに住む中国系移民の言語、文化、およびポリネシア系住民との関係にも触れている。

まず、言語について、移民一世である李寿は主に中国語を話した。李寿の妻はポリネシア人で、娘のマリーは父とは中国語、母とはタヒチ語またはトゥアモツ語、学校ではフランス語を話していた。畑中は李寿とうまく意志疎通が図れなかったため、マリーに通訳を頼んでいたのだという。李寿は、言語だけでなく、風俗・習慣の点で中国のそれを継承していた。彼は、中国式の墓の前に線香をたいて参拝するという祖先崇拝の形式を維持していた。だが他方でカトリックも信じ、毎週日曜日に教会に礼拝していた [畑中 1967 : 98-99、 156]。

李寿は、商売で成功し豊かであった。当時のタヒチは外国人が土地を所有することを禁じていたが、彼はプカルアで 7 カ所に土地をもっていた。ポリネシア系の島民は、ドライな金のやりとりをする李寿に不平不満を漏らしながらも、土地の貸借関係が結ばれていた。ポリネシア系の島民は李寿がもつ物品にも頼っていた。たとえば、彼がタヒチの中国人の店から持ってきた「ファオテ」という薬は、疲労や筋肉痛、神経痛を治すものとして重宝されていた。当時、中国系移民はフランス人らと同等に「上等な」人びととみなされ、中国人との間に生まれた混血児も「タマリキ・ブルム」と呼ばれ、卑しまれずに済んだのだ

という [畑中 1967 : 83、 89、 184]。

拙著『南太平洋の中国人社会』 [河合 2024] で整理したように、タヒチの華僑華人をめぐる研究はすでに英語、フランス語、中国語で少なくないが、その大多数はタヒチ島とライアテア島を対象としており、プカルアの華僑華人をめぐる記録はいまだに限られている。その意味で、本書がフィールドワークから得た情報は、華僑華人全体にとってもいまだに高い資料的価値をもっている。1960年代というと、アメリカの人類学者であるリチャード・モエンチがライアテア島でフィールドワークを実施した時期でもある [Moench 1963]。モエンチは、タヒチ島やライアテア島などを結ぶ中国人移民の交易ネットワークが存在していたことを述べているが、畑中の調査記録は、そのネットワークがさらに遠いプカルアにまで広がっていたことを示唆している [畑中 1967 : 129-130]。プカルアでは、中国人がもたらす物質は「文明的」なものであり、彼らの活動はカトリックとよい勝負であったのだという [畑中 1967 : 131]。

批評と展望

本書は——もちろん専門書でないこともあるが——中国研究畑の出身である筆者からすると、物足りなさを感じなくもない。たとえば、畑中は李寿の話す言葉が「中国語」であると言っているが、この年代の広東省出身の老人は標準中国語を不得手とすることが多いから、李寿やマリナーらが話していたのは、おそらく広東語か客家語であろう。従兄の張文禎の墓に刻まれていた「清色黄茂村」もどこなのか、広東省で長年フィールドワークをしてきた筆者でも想像がつかない。初期のタヒチの中国人社会では、客家と本地人(広府人)の間の区別が顕著であったといわれる。それならば、李寿が多数派の客家であるのか少数派の本地人であるかによって、その交易ネットワークや生活の様態がかわってくるだろう。だが本書はこの点については触れていない。

しかしながら、本書は、こうした問題を補って余りあるほど、オセアニストの視点から中国人とポリネシア人との関係、およびポリネシア人による中国人観を、巧みなタッチで描き出している。これらのデータは、中国系移民を主人公とし、中国的な特徴ばかり探し出して表象するタイプの華僑華人研究とは一線を画すものである。近年では、華僑華人研究の間でも中国の外で「中国探し」ばかりするのではなく、現地における中国人—非中国人の関係性をより実直に描き出していくべきとする声が高まっている [cf. 津田・櫻田・伏木編 2017]。オセアニアの華人の場合、中国研究者・華人研究者だけでなく、畑中のよ

うなオセアニアストの視点から中国との関係性を捉えていく、協働が必要となるであろう。

本書は、そのような可能性を感じさせる一冊である。すでに刊行から 50 年以上経ってはいるが、いま海域アジア・オセアニア研究の可能性を考えるうえで価値の高い古典書となっている。

参照文献

河合洋尚 2004 『南太平洋の中国人社会——客家、本地人と新移民』 風響社。

畑中幸子 1967 『南太平洋の環礁にて』 岩波新書。

津田浩司・櫻田涼子・伏木香織（編） 2016 『「華人」という描線——行為実践の場からの人類学的アプローチ』 風響社。

Moench, Richard U. 1963 *Economic Relations of Chinese in Society Island*. Ph.D Dissertation, Harvard University.

（かわい・ひろなお 東京都立大学）

2024 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学 拠点研究会・活動報告

講演会：「マレーシアにおける民族カテゴリーをめぐる思惑 —なぜオラン・アスリは消滅しないのか」

信田 敏宏（国立民族学博物館）

日時：2024 年 11 月 15 日(金)17:00-19:00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 1 号館 103 教室

要旨：

マレーシアは、インドと中国という二大文明のはざまに位置し、太古より東西交易の要衝の地、いわゆる海のシルクロードの中継地として栄えてきた。当時からマレー半島には、多様な民族が行き交い、通り過ぎる者あり、来訪する者あり、そして定住する者もいた。混沌とした民族の往来は、大航海時代、植民地時代、日本による占領期を経てもなお、連綿と続き、現在に至っている。こうした人々の移動は、歴史の中に点在するものではなく、つながった線となって今に至っていると考えられる。

マレーシアといえば、「多民族国家」という枕詞がつきものであるが、本講演では、マレーシアにおける多民族共生について、ブミプトラ政策に焦点を当てて考察する。ブミプトラ政策とは、イギリスからの独立以降、1965 年のシンガポール分離独立と 1969 年の人種暴動を経て 1970 年代初頭に開始された新経済政策である。

本講演では、ブミプトラに属するマレー半島の先住民、オラン・アスリを取り上げる。ブミプトラとは、「土地の子」という意味で、ブミプトラのカテゴリーには、先住民族である「マレー人」や「オラン・アスリ」などの民族が属し、一定の優遇措置が施される。しかし、オラン・アスリはマレー人以外のブミプトラ（「他のブミプトラ」）と位置付けられ、マレー人と同等の待遇とは言い難い状況が続いている。こうした状況に対して、オラン・アスリとサバ州・サラワク州の先住民は連携し、自らを「オラン・アサル」と名乗り、先住性を主張し、先住民としての権利を求めている、というのが今日的状況である。

本講演では、ブミプトラと非ブミプトラの間の分断や、ブミプトラ内部の民族の分断や階層性、そしてオラン・アスリ内の民族の流動性や動態性を示しながら、多民族国家のな

かで、時代・社会・政治に翻弄されながらも、それぞれの民族に見え隠れする思惑を紐解くとともに、人口が極めて少ないオラン・アスリがいまだ消滅せず存在し続ける要因について考察する。

2024 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト全体会議「食・モノ・環境」

日時：2025 年 2 月 1 日(土)13:30~18:30、2 月 2 日(日) 10:00~12:00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 6 号館 101 教室

使用言語：日本語（部分的に英語）

開催形式：対面およびオンラインのハイブリッド形式

タイムテーブル：

2 月 1 日(土) 個人発表（「食・モノ・環境」）

13:30 開幕挨拶：小野林太郎（国立民族学博物館・教授）

13:40 野林厚志（国立民族学博物館・教授）

「救荒植物食文化——ヒトの環境適応戦略」

14:10 師田史子（京都大学大学院・助教）

「モノ化する鶏、鶏を食して弔う人間：フィリピンの闘鶏にみる人間－鶏の両義的関係」

14:40 明星つきこ（日本学術振興会特別研究員／東洋大学）

「船大工道具からみる南スラウェシの森と海」

15:10 ピーター・マシウス（国立民族学博物館・名誉教授）

“Food from the Bowels of the Earth: Taro, Fish and other Ingredients in Bangladesh” 「大地の恵み：バングラデシュのタロ、魚、その他の食材」

15:40 休憩

16:00 竹川大介（北九州市立大学文学部・教授）

「海に沈む村々ー海浜に居住するソロモン諸島海洋民ラウへの地球温暖化によるこの 20 年間の変化」【オンライン発表】

16:30 小林 誠（東京経済大学・准教授）

「ココヤシを植えたあとで——フィジー・キオア島における土地の所有と利用」

17:00 飯田晶子（東京大学大学院・特任講師）

「パラオにおける食と景観：グローバル化とローカル化の交差」

17:30 大西秀之（同志社女子大学・教授）

「土地にまつわる記憶：奄美群島の儀礼をめぐる景観史」【オンライン発表】

2月2日(日)

ラウンドテーブル

司会：河合洋尚（東京都立大学）

10:00～12:00 「いま海域アジア・オセアニア研究をいかに捉えるか？」

パネリスト：河合洋尚（東京都立大学）、小野林太郎（国立民族学博物館）、古澤拓郎（京都大学）、長津一史（東洋大学／ウェブ参加）

* パネリストから1時間ほどの問題提起をした後、続く1時間は全体で議論を行った

海域アジア・オセアニア NEWSLETTER 第3号

発行日 2025年3月31日

編集発行 海域アジア・オセアニア研究プロジェクト 東京都立大学拠点

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 東京都立大学人文科学研究科

transnesiatmu@gmail.com